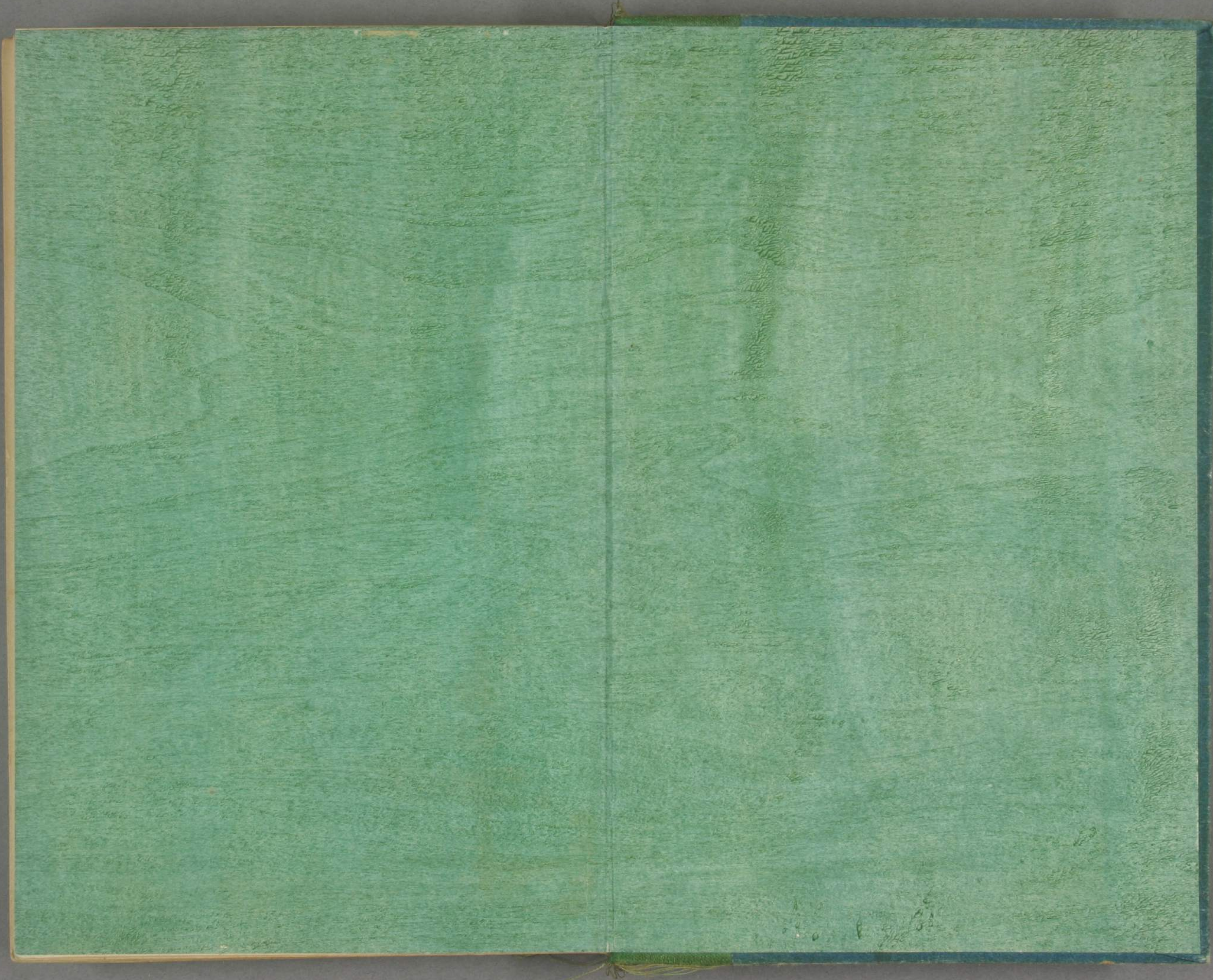


繪入  
歌集

廿日  
竹由

二四六  
二





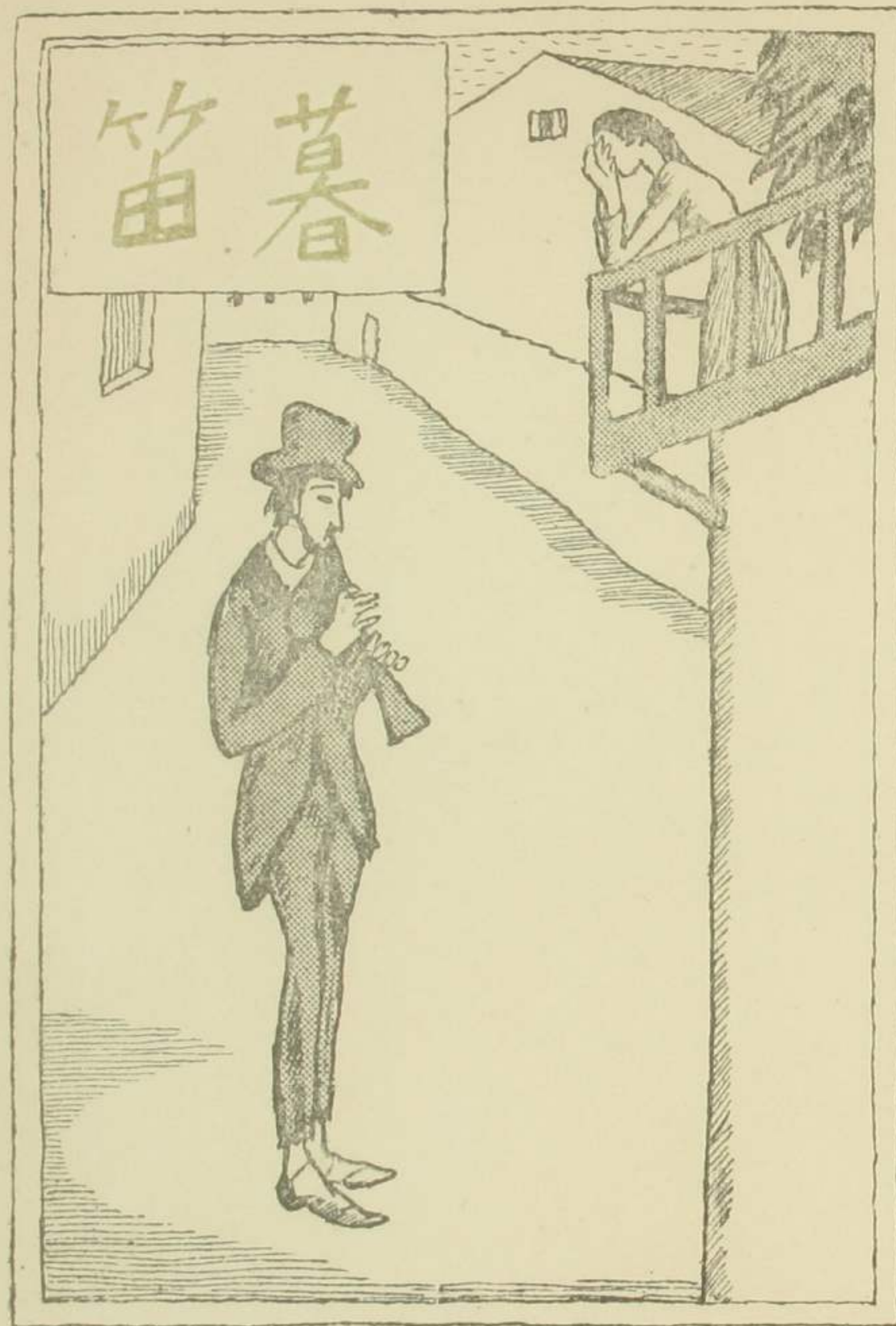
繪入  
歌集

暮

笛

竹久夢二著

東 三  
京 陽 發  
堂 兌



## 序

この本は、先きに出した「繪入歌集」を増補改版したものです。ここに撰んだ歌は、遠く萬葉から近代にいたる各々の時代の作で、私の記憶に残つてゐるものだけです。作者の名も今はさだかに覚えぬほど昔に讀みおぼえたものもあるし、また人に知られずに散る名もない一少女の手紙のはしに書きつけてあつた野の花のやうな作もある。それにしても曾てそれ／＼の時代に、私の心に共鳴しないものはないのです。それゆゑ、歌によせた繪にも、平安朝の大宮人が洋傘をかざして銀座の街をゆくもあれば、洋服をきて寧樂の舊都をさまよふ髪長き詩人もある。この時代錯誤も私にはきわめて自然です。この本をよむ人に、この私の我儘な満足を許して貰ひたい。

千九百十六年十一月二十五日

京都にて

夢

一一











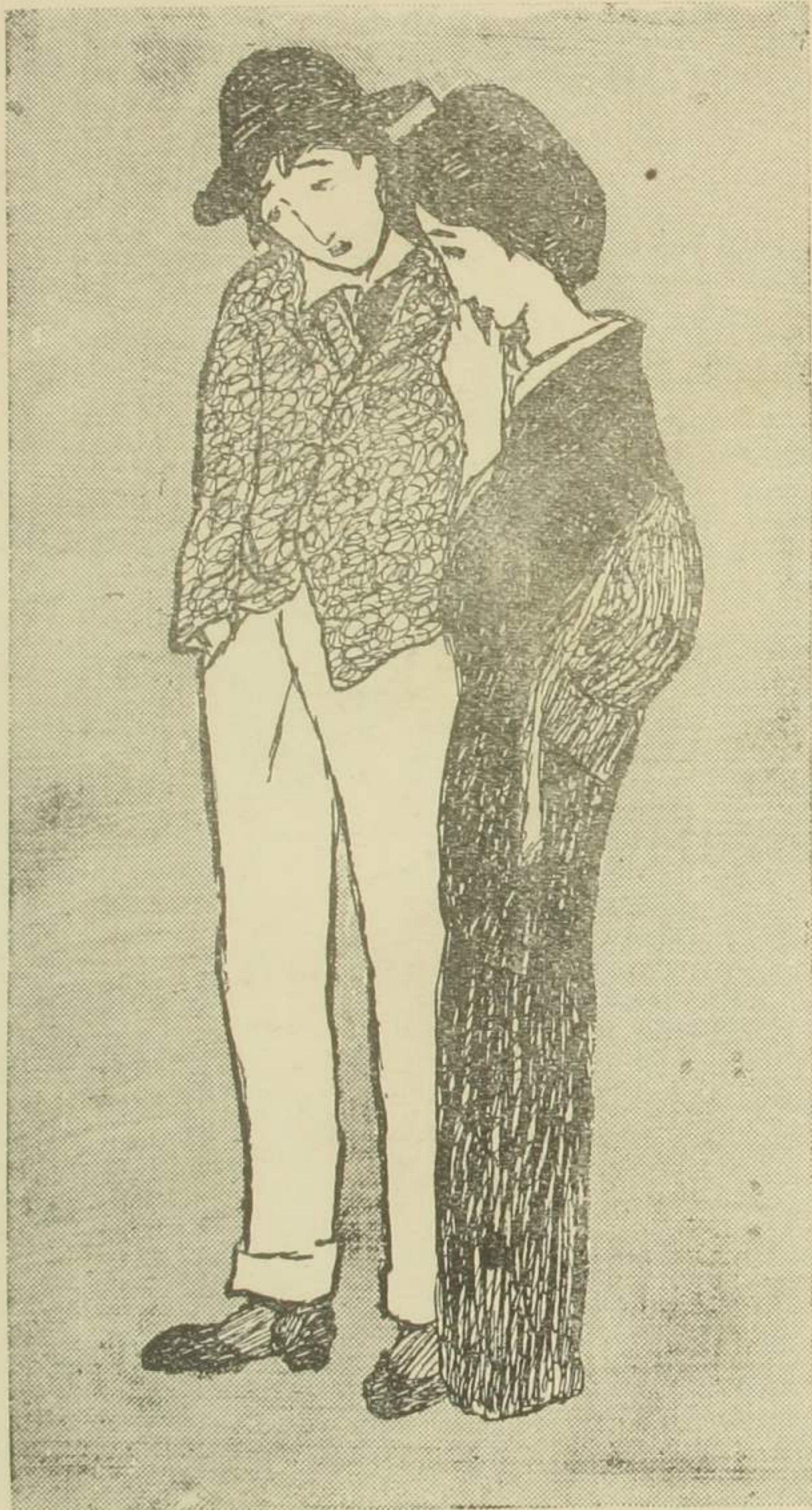


ROTEKI

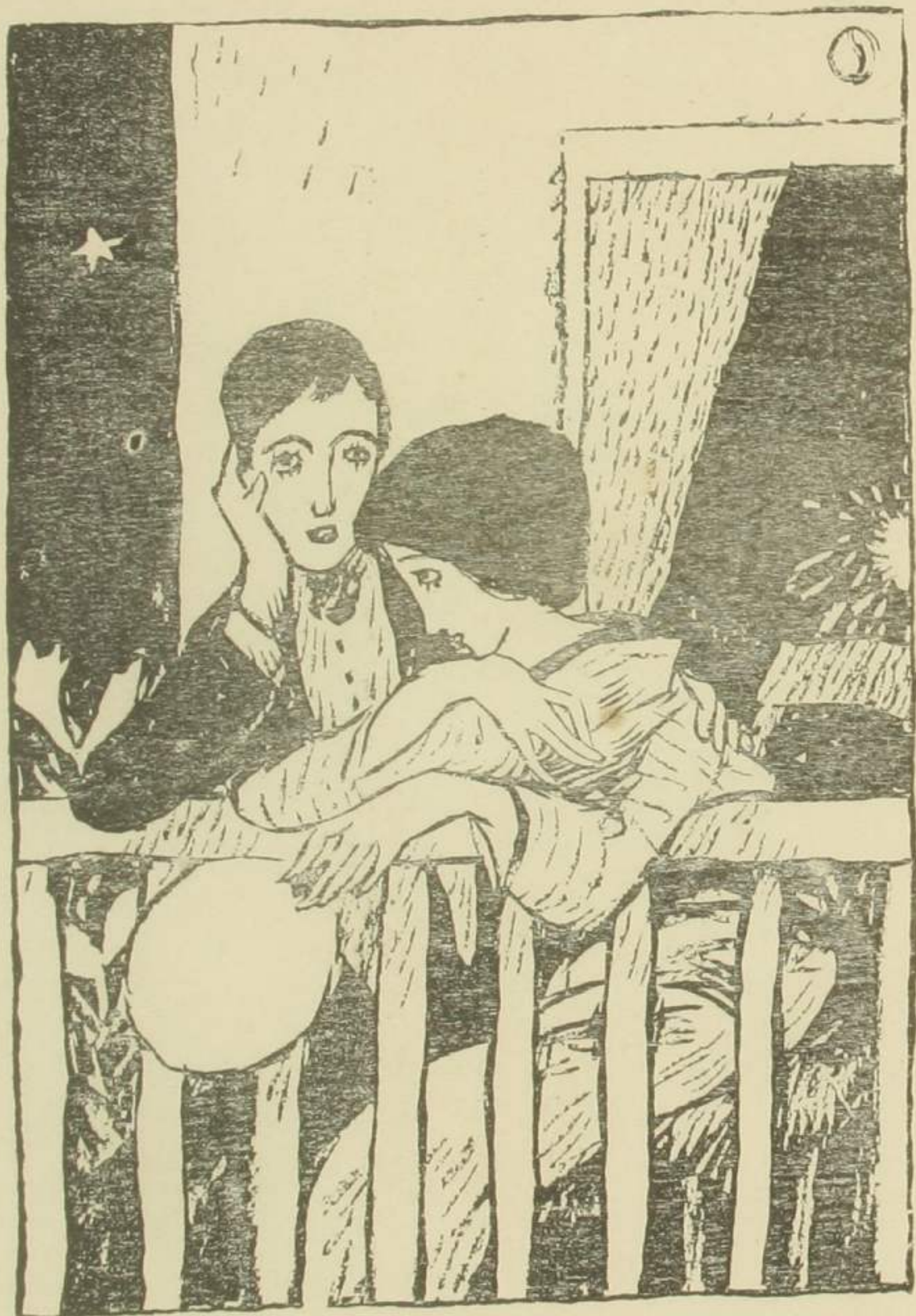




ほそくところらこゝらに虫むしのなく畫ゑ  
の野のにきてよむ手紙てがみかな。



水をみて流るゝ水を見てありぬ日はか  
くてありもえしかど。



かの宵の露臺のことはゆめひとにいひ  
たまふなど言へるきみかな。





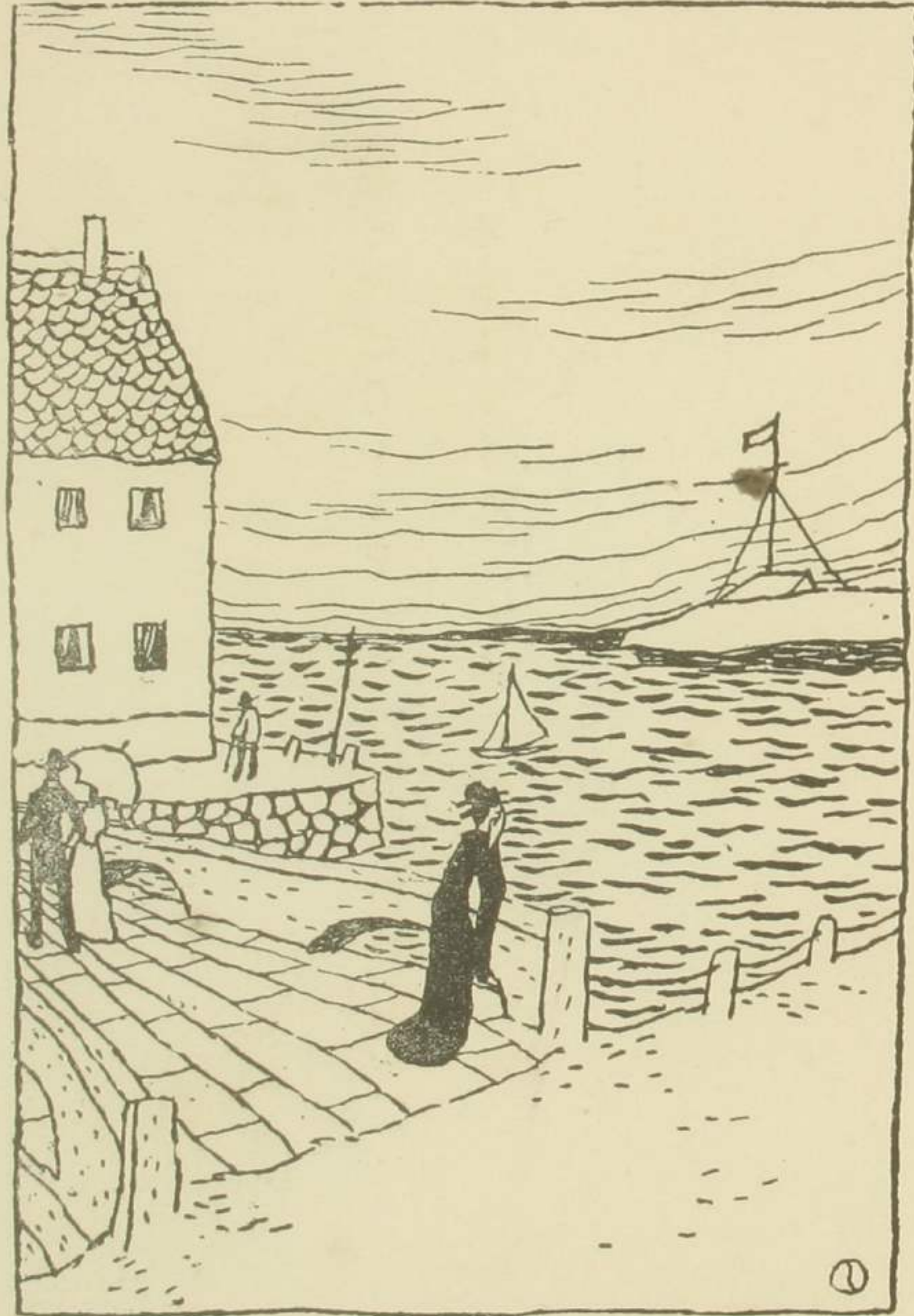
紫は灰さすものぞ椿市の八十のちまた  
に逢へる子やたれ。



悲<sup>かな</sup>し<sup>く</sup>も<sup>も</sup>母<sup>は</sup>が<sup>ま</sup>つ<sup>ゆ</sup>え<sup>い</sup>妹<sup>い</sup>が<sup>ま</sup>つ<sup>ゆ</sup>え<sup>い</sup>家<sup>い</sup>  
に<sup>け</sup>今<sup>ふ</sup>日<sup>も</sup>か<sup>へ</sup>ら<sup>む</sup>。



身みごもるこさゝてかなしき妻つまおもふ無い  
花果ちぢくの實みの青あをき八月はちがつ。



鳥とべば君か  
とぞおもふかなしき通ひ路  
とぞおもひ風ふかば君か



なげけとていまはた目白<sup>めしろ</sup>俗園<sup>ぞくえん</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>の鐘<sup>かね</sup>  
もなりいでにけむ。

22  
94



まつり日や見世物小屋のかたはらの蚊  
帳釣草にふる夏の雨。



花見れば花のかはゆしつみてましつむ  
とも何のなぐさめにせむ。

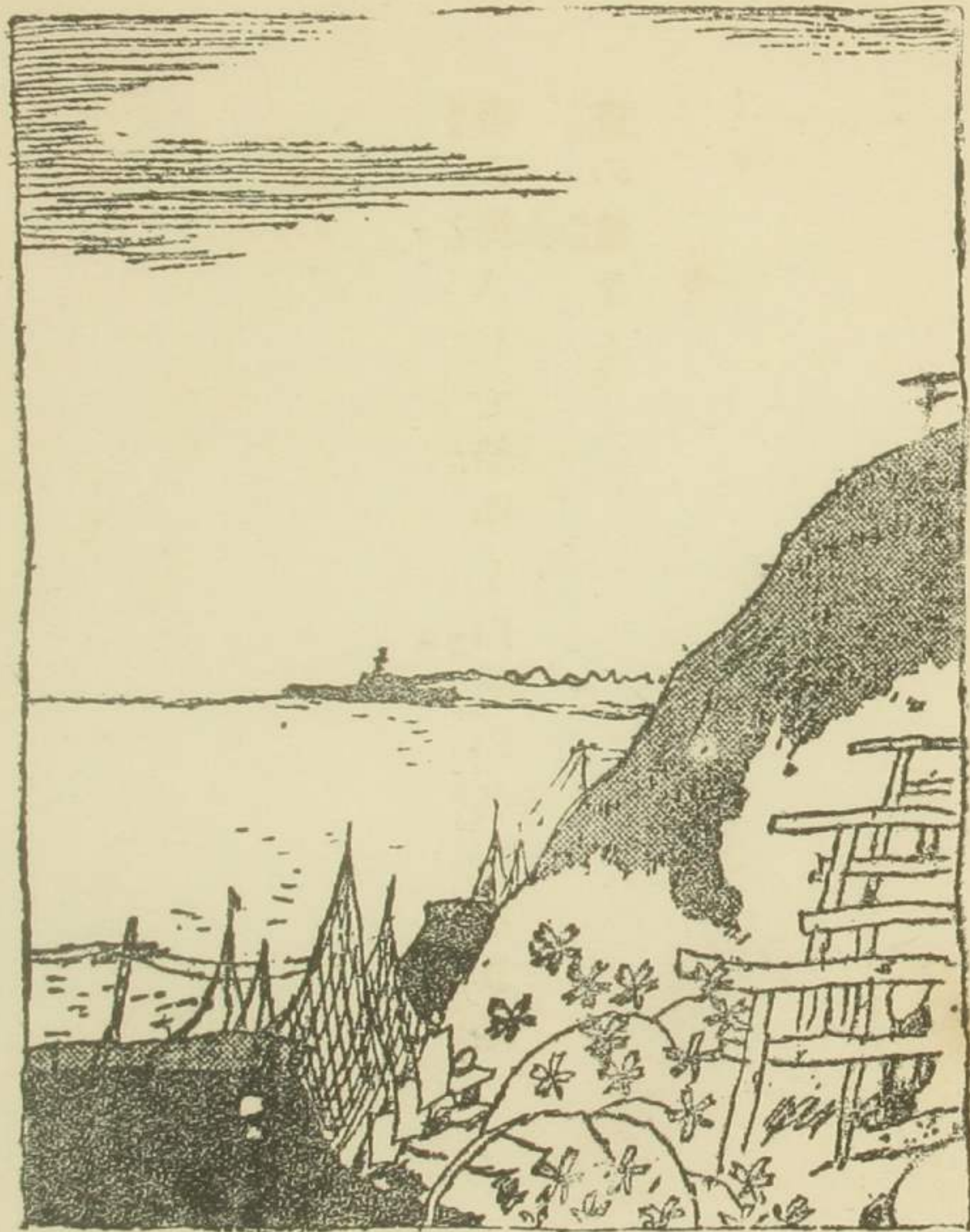


黄昏たそがれのよりどころなき魂たましひか柳やなぎのかけを  
蝙蝠かほりのとぶ。

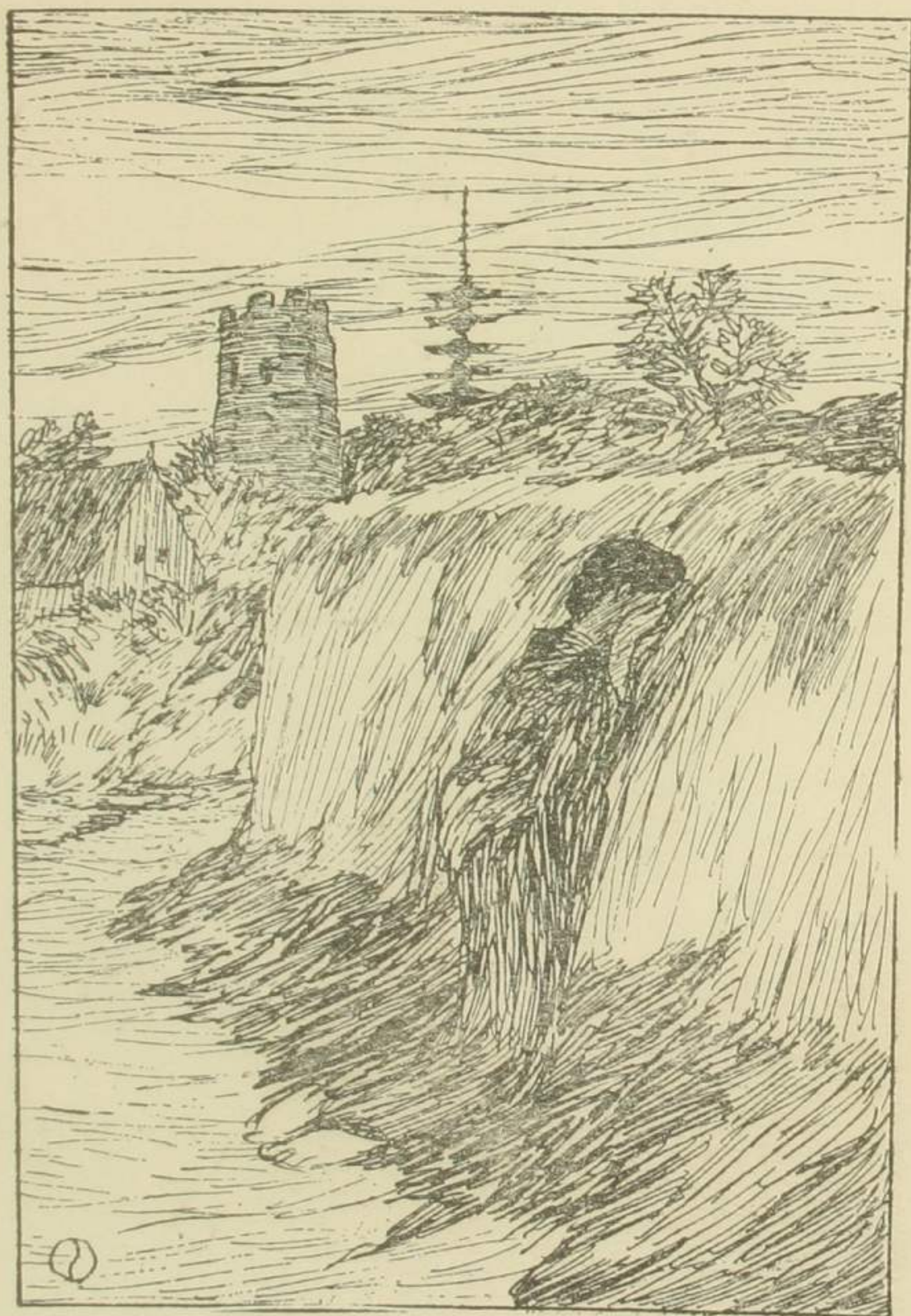




片手なき人形ひとつまろびぬる木の  
か  
げ青き子供部屋かな。

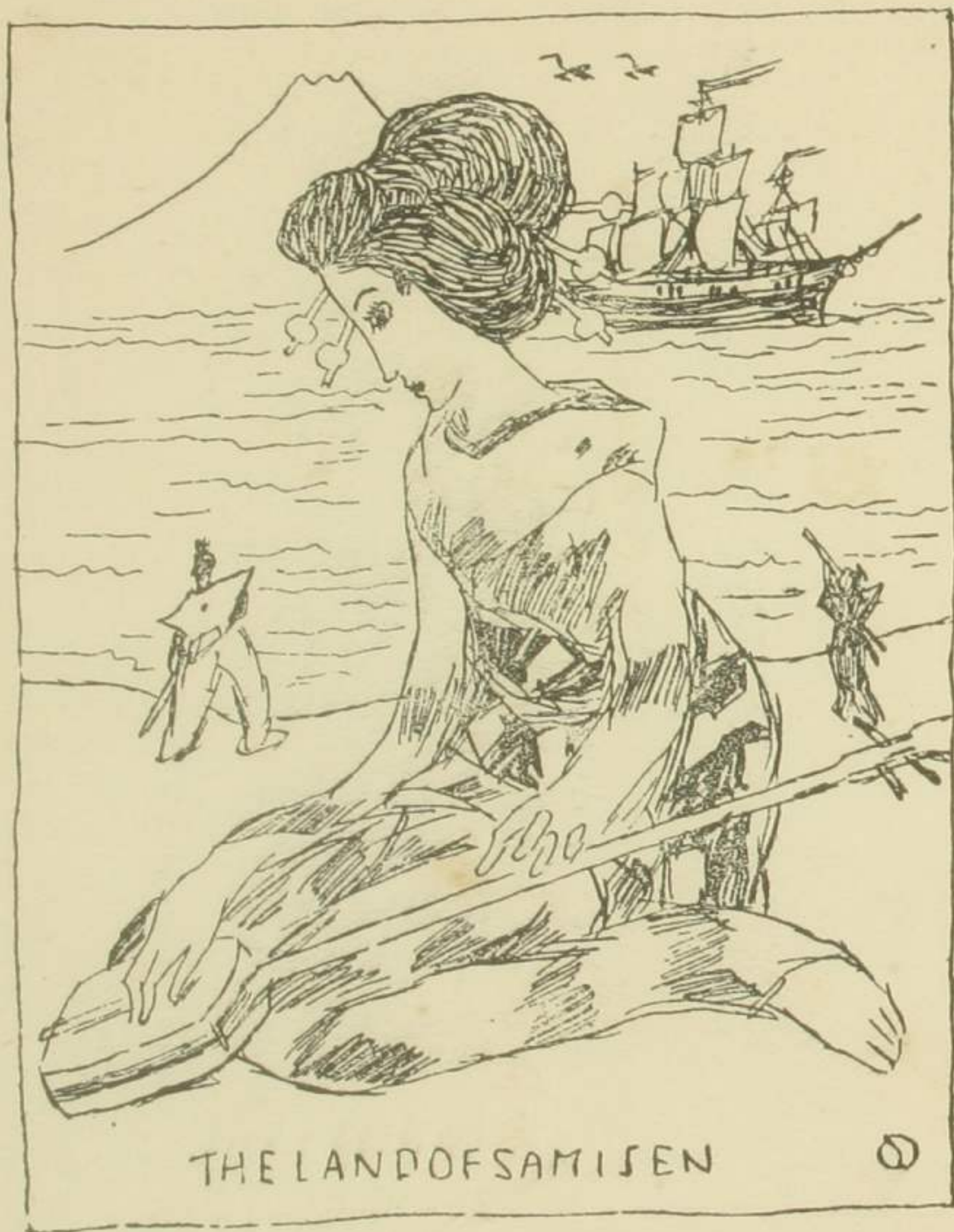


春はるの海うみさして船ふねゆく山やま蔭かげの名なもなき港みなと  
晝ひるの鐘かねなる。



夕ぐれゆぐれのこりあつめたる霧きりのうちしづ  
かに人の泣なく音ねきこゆる。

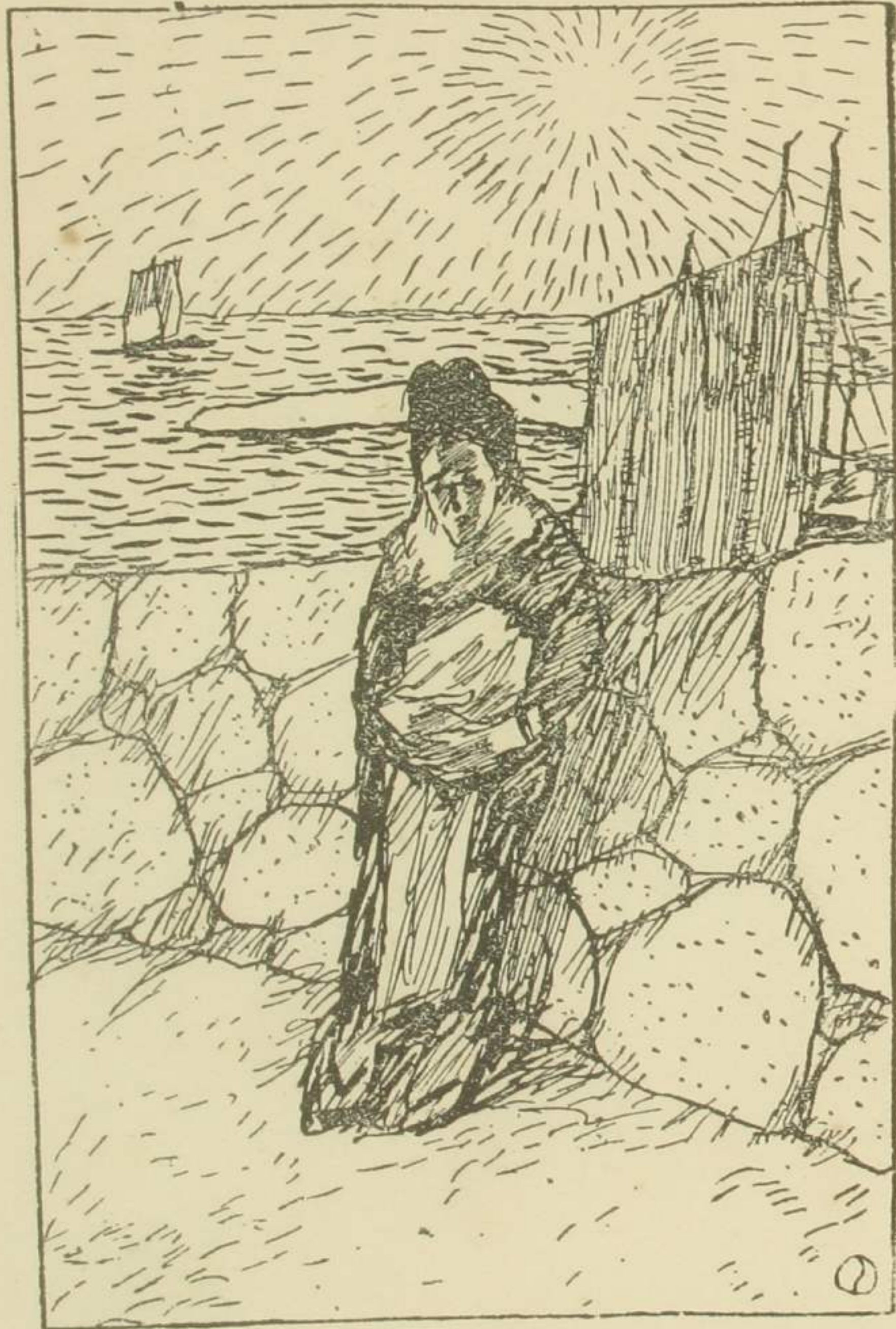
紅  
乾



問ふまゝに死ぬる薬をおしへやる生き  
てかひなき夜の女に。



おほかたのあはれをしるにおつれども  
涙<sup>なみだ</sup>はきみにかけてこそおもへ。



晩秋の波止場の道にこぼれたる豆をさ  
びしみかへるたそがれ。



戸<sup>ど</sup>なひきそ戸<sup>ど</sup>の面<sup>おも</sup>に今<sup>いま</sup>しゆく春<sup>はる</sup>のかな  
し<sup>な</sup>さみてりこよ何<sup>なに</sup>か泣<sup>な</sup>く。



港入り娼家の壁が落日にかがやけるこ  
そかなしかうけり。





いつはしも戀<sup>こひ</sup>ひぬ時<sup>とき</sup>とはあらねどもゆ  
ふかたまけて戀<sup>こひ</sup>はすべなし。

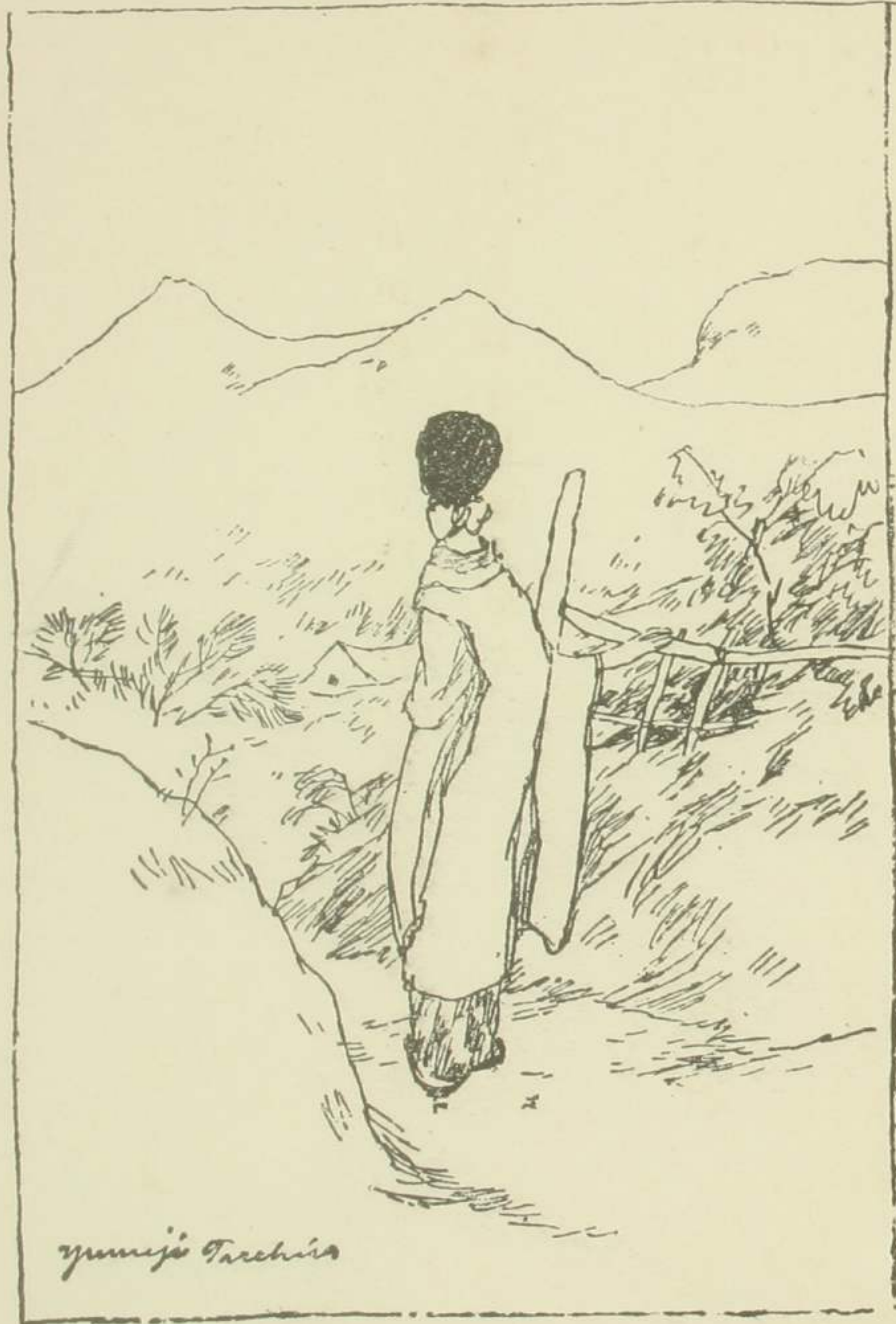


朝なसान草のへしろくおく露のけなば  
ともにといひし君はも。



ゆく水みづに赤あかき日ひのさし水みづぐるま春はるの川かは  
瀬せにやまずめぐるも。

付  
、 秋



わが屋戸の夕蔭草の白露のけぬがにも  
となおもほゆるかも。



た  
ら  
ち  
ね  
の  
母<sup>は</sup>  
が  
呼<sup>よ</sup>  
ぶ  
名<sup>な</sup>  
を  
ま  
を  
さ  
め  
ご  
道<sup>みち</sup>  
ゆ  
き  
び  
と  
を  
誰<sup>たれ</sup>  
と  
知<sup>し</sup>  
り  
て  
か。



いまはたゞ櫂の鈴のみなつかしき雪の  
戸なれば馬にむちうつ。



はたらかば母の氣嫌もなほるかど針と  
りあげて涙ぬぐへり。



頬につたふ涙のごはす一握の砂をしめ  
しゝひとをわすれず。

家  
水





惜<sup>をし</sup>めども春<sup>はる</sup>のかざりの今日<sup>けふ</sup>の日の夕<sup>ゆふ</sup>暮<sup>ぐれ</sup>  
にさへなりにけるかな。



はかもなき露つゆのほごにもきえてまし玉たま  
となりけんかひもなき身みを。



いつしかに浅きうき名もたちけらし浮  
世新道夏のたそがれ。

自叙



うつせみのつねの言葉とおもへどもつ  
ぎてしきけば心はなきて。



桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほ  
しさにあゆむ雨かな。



春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく  
たむ名こそをしけれ。



すくく〜とおひたつ麥むぎに腹はらすりて燕つばきと  
びくる春はるの山畑やまはた。



春はるの月つき椽えんの雨あめ戸どのおもからば逢あはでか  
へらむ歌うたうたへきみ。





わすれじのゆく末<sup>すま</sup>まではかたけれど今<sup>け</sup>  
口<sup>くち</sup>をかぎりの命<sup>いのち</sup>ともかな。



君<sup>きみ</sup>おもふあまた男<sup>おとこ</sup>のそのなかのこの櫛<sup>くし</sup>  
挽<sup>びき</sup>どもへば哀<sup>かな</sup>しも。



越えもせむ越さずもあらん逢坂の關守  
ならぬ人なとがめそ。



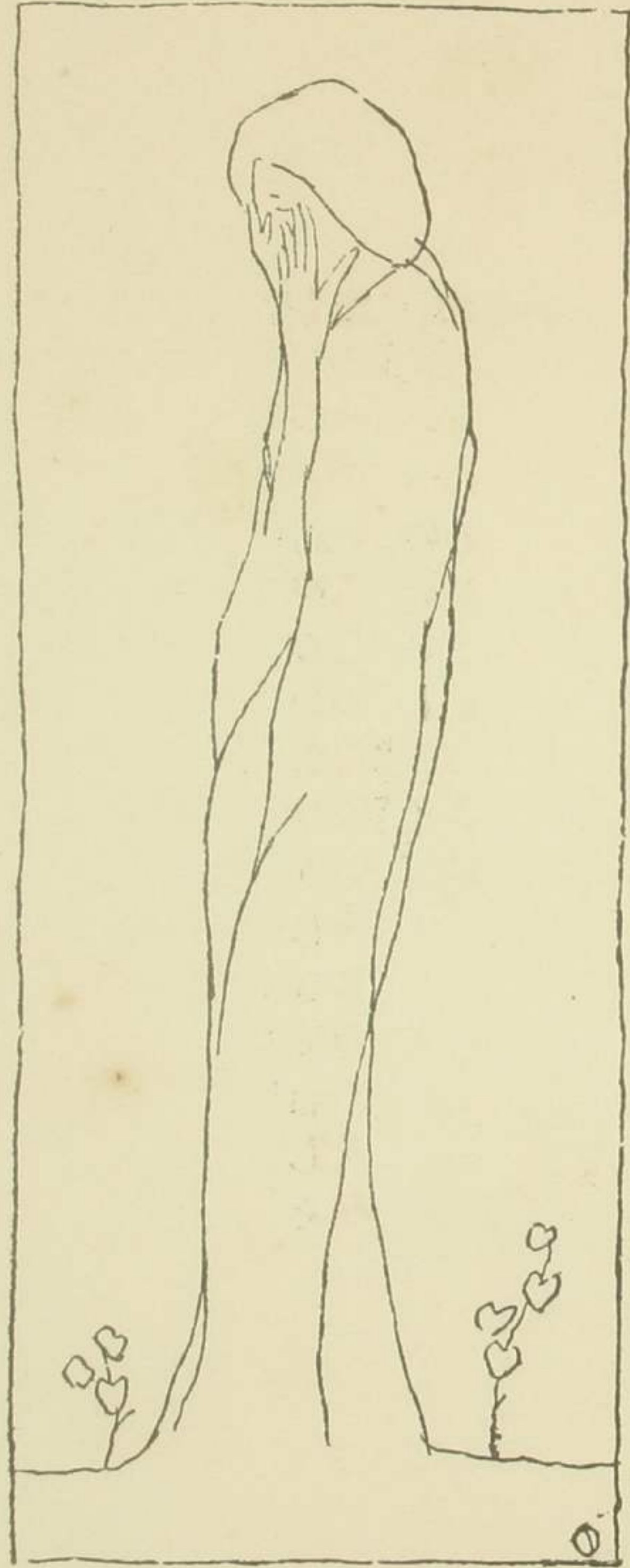
その人も泣いてわかれたこの人もない  
て別れる夏柳かな。



うらがなし歸<sup>かへ</sup>りて君<sup>きみ</sup>が父<sup>ちち</sup>のまへいふい  
ひわけのおぼつかなしも。



かたく手に抱けば死をも辭しがたき心  
とぞなる人のかなしも。

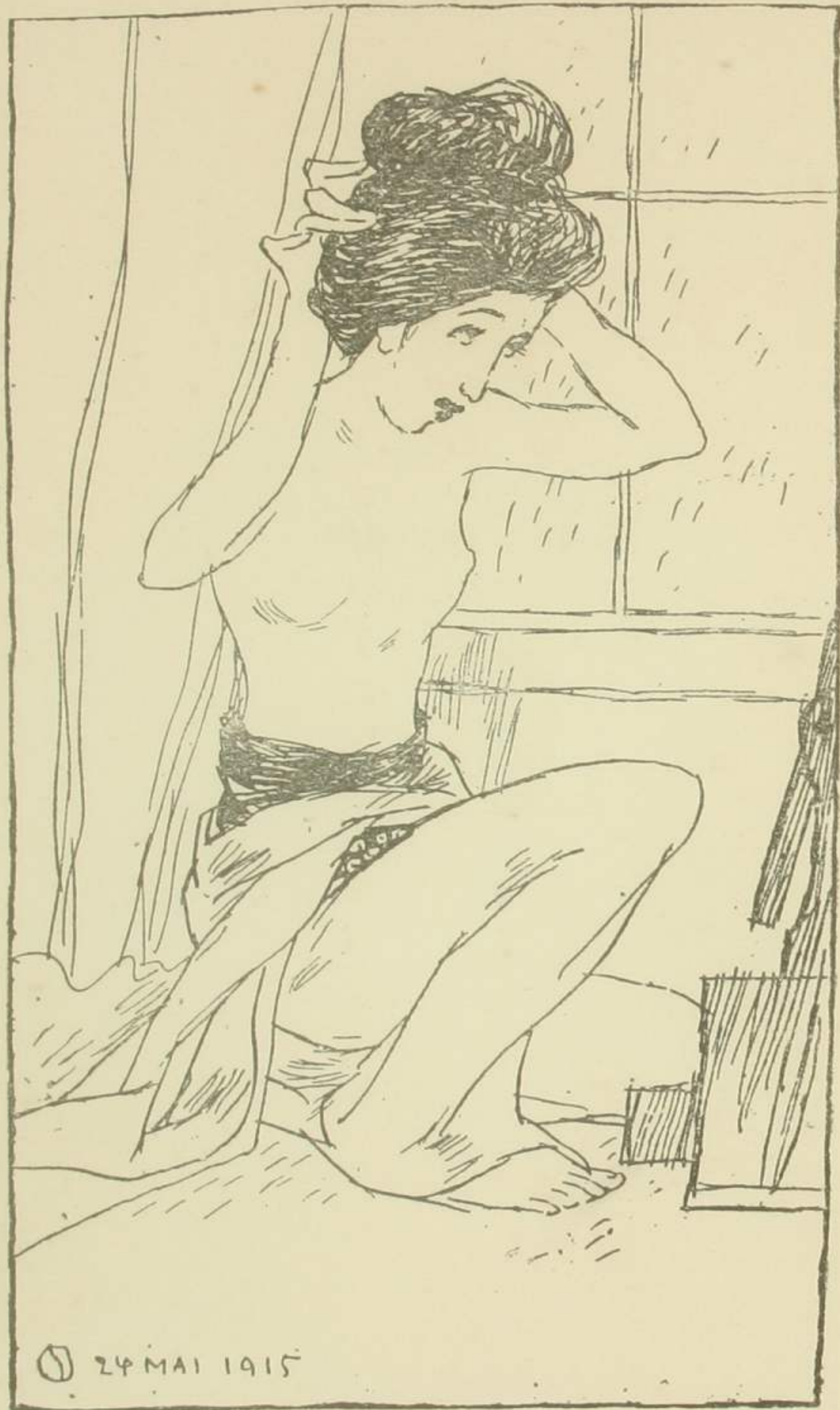


道のべのいちしの花のいちじろく人み  
なしりぬわがこひづまは。



今<sup>いま</sup>をかも萌<sup>も</sup>ゆるかふたりしきさてねしそ  
の丘<sup>か</sup>のへのいとし若<sup>わか</sup>草<sup>ぐさ</sup>。





ほのくそ野のうすみどりうつるなり  
君が化粧の春の鏡に。



ありし口の少女のごとき眠してなせに  
今宵はむかへくるゝや。

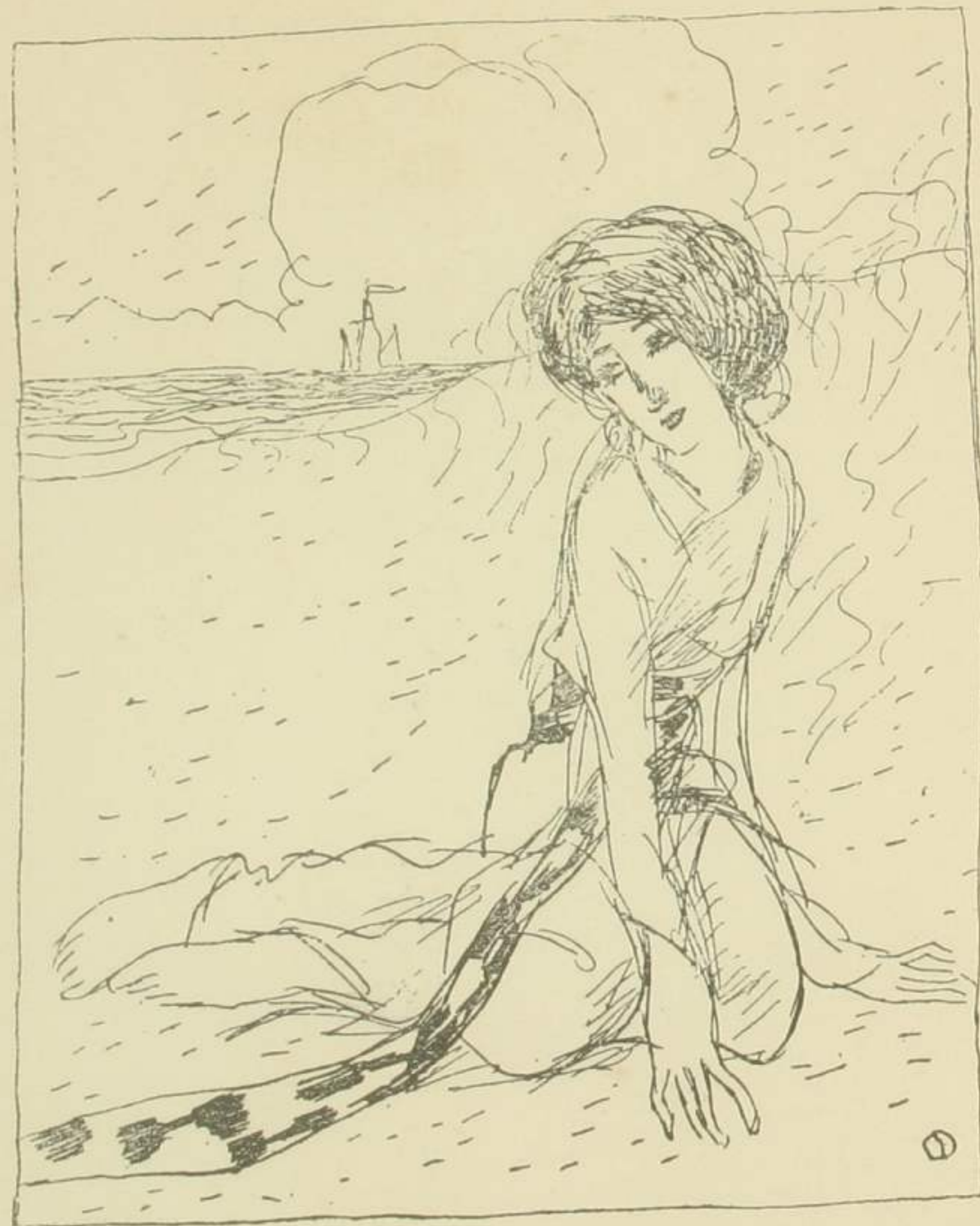


ねもごろに片思ひすれこのころのわが  
こゝろの生けりともなき。



ゆるしたまへ月づきにあはれをさそはれし  
夏のなつひと夜よのたはむりなりしを。

る  
る



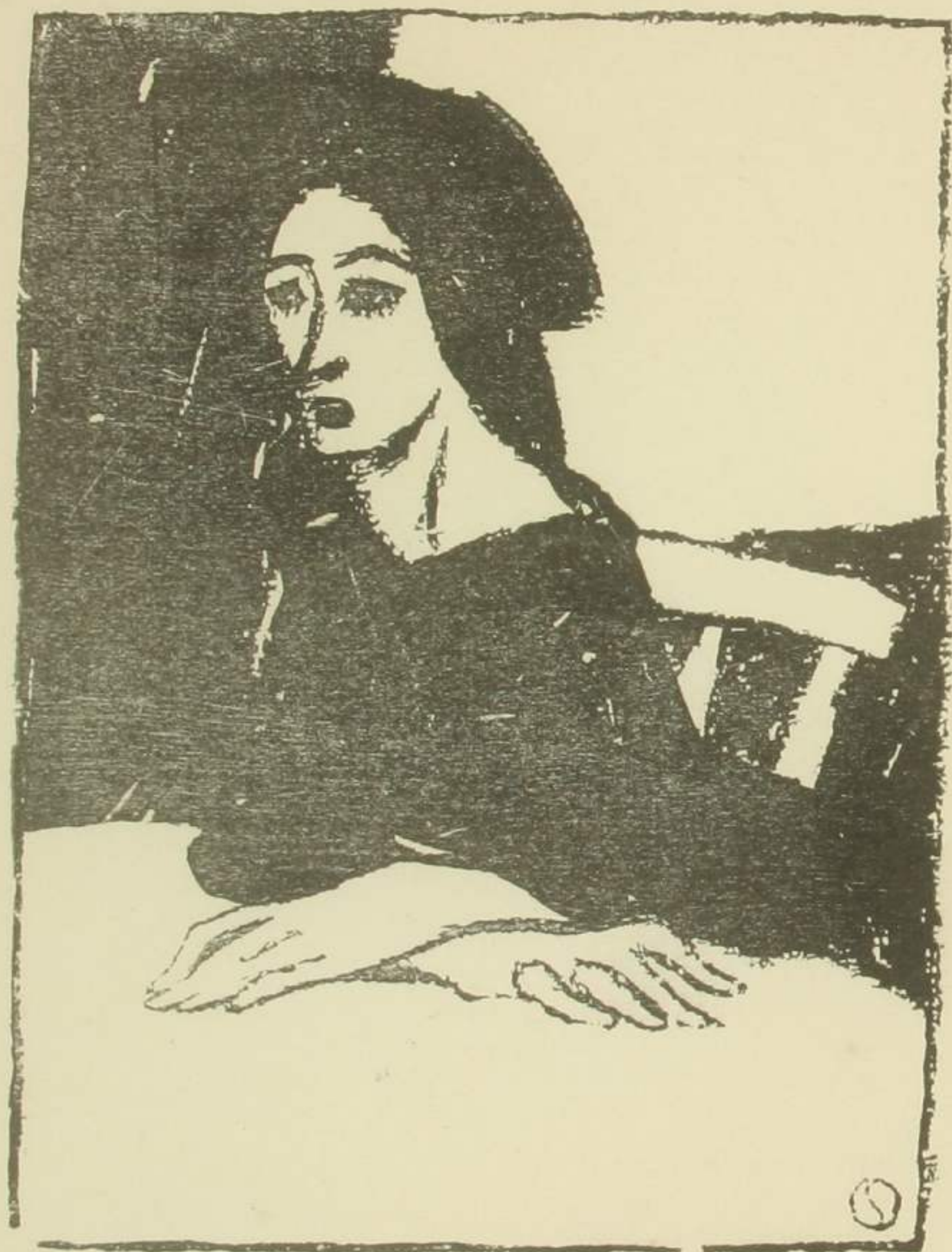
夏の帯いさごのうへにながくことさ  
てかこちぬ身さへほそると。



なにかしらかぞへて折<sup>を</sup>りし手<sup>て</sup>の指<sup>ゆび</sup>の握<sup>にぎ</sup>  
りしまゝに哀<sup>かな</sup>しかりける。



あはれまたねむりたまふやたまさかに  
逢ふ夜はわけて短きものを。



またみむはいつの宵ぞもしかすがにつ  
めたくふるゝ黒髪かなし。

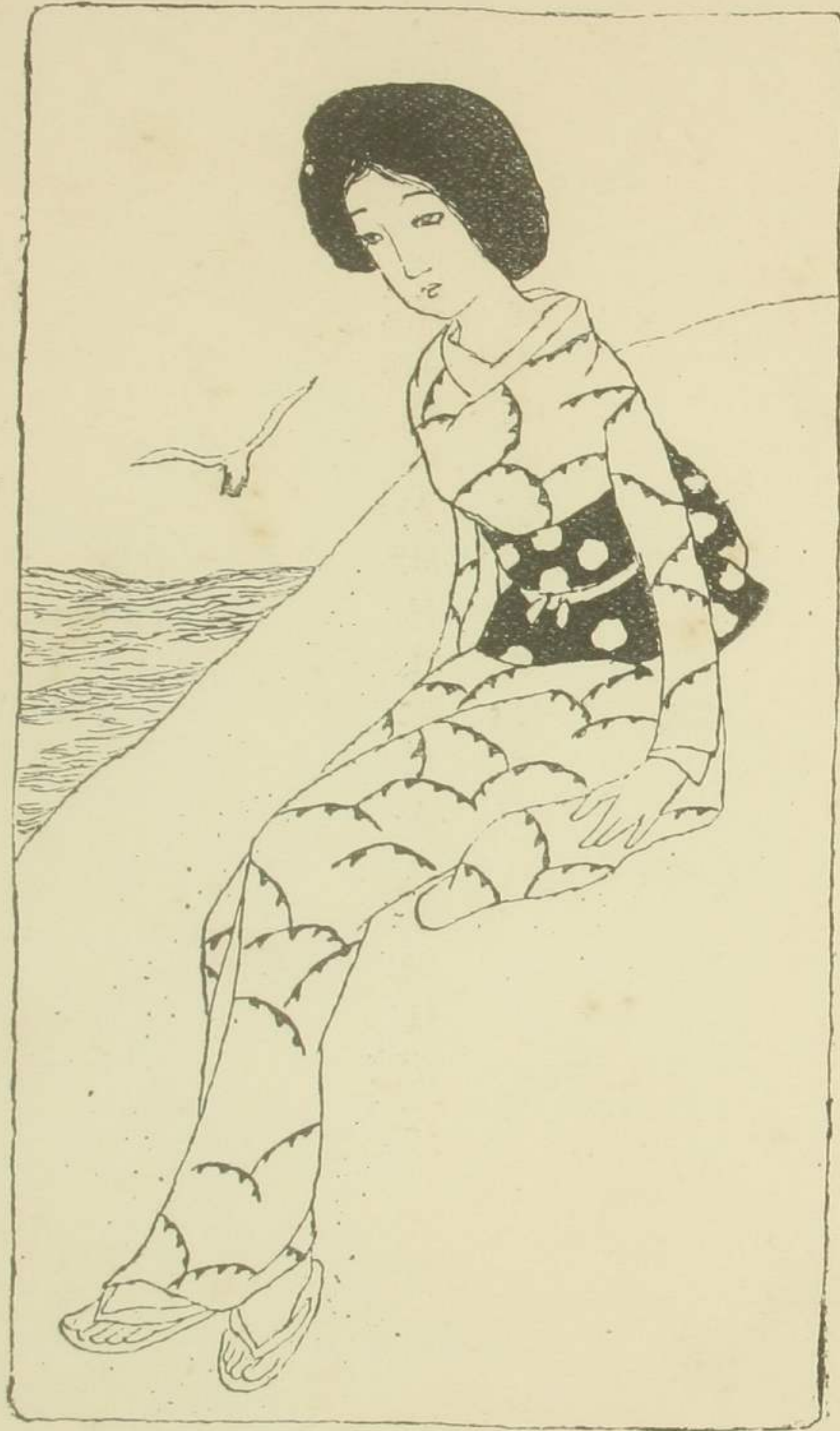




なにゆるゑに戀こひのはじめにかくばかりかな悲かな  
しきことをきみはのたまふ。



何處<sup>どこ</sup>やらむかすかに蟲<sup>むし</sup>のなくごとく心<sup>こころ</sup>  
ほそさを今日<sup>けふ</sup>もおぼゆる。



妹いもうとよわれも母ははをば持もたざりきちほかた  
の日はかなしかりけり。



春はるの夜よの月つきのうちにもかくれまし思ふ  
と君きみにつげ得えたるのち。

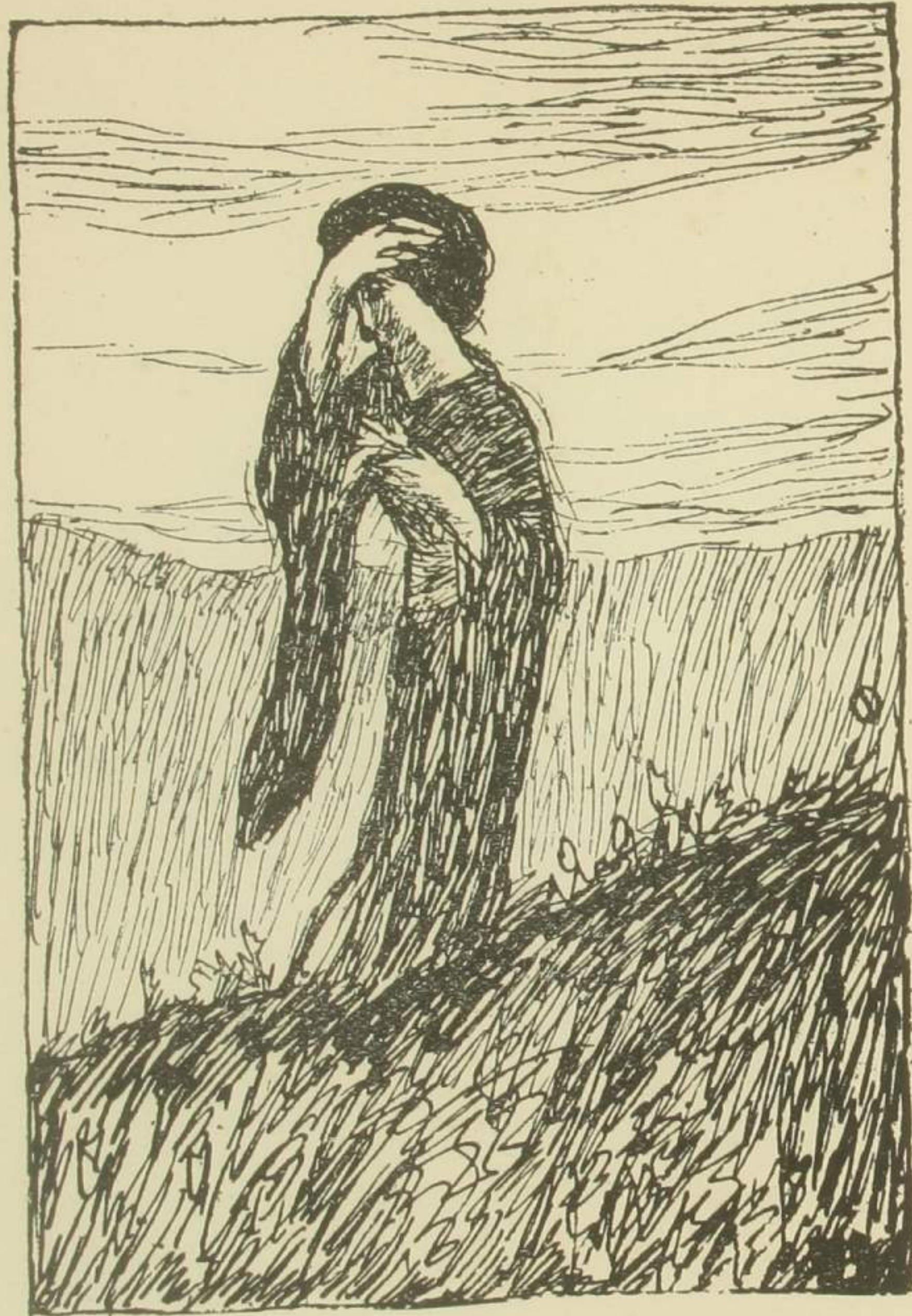
百  
二



思出<sup>おもいで</sup>もとほき通草<sup>あつらひ</sup>のかなし花<sup>はな</sup>きみにし  
らえずちりかすぎなむ。



別れむとするかなしみにつながれて逢へばかはゆしすてもかねたる。



白芥子よ暮春はものゝ哀しさの身にし  
みわたり人の戀しき。



風なきに緋桃みだる、今宵なりみだれ  
て君の戀しき夜なり。

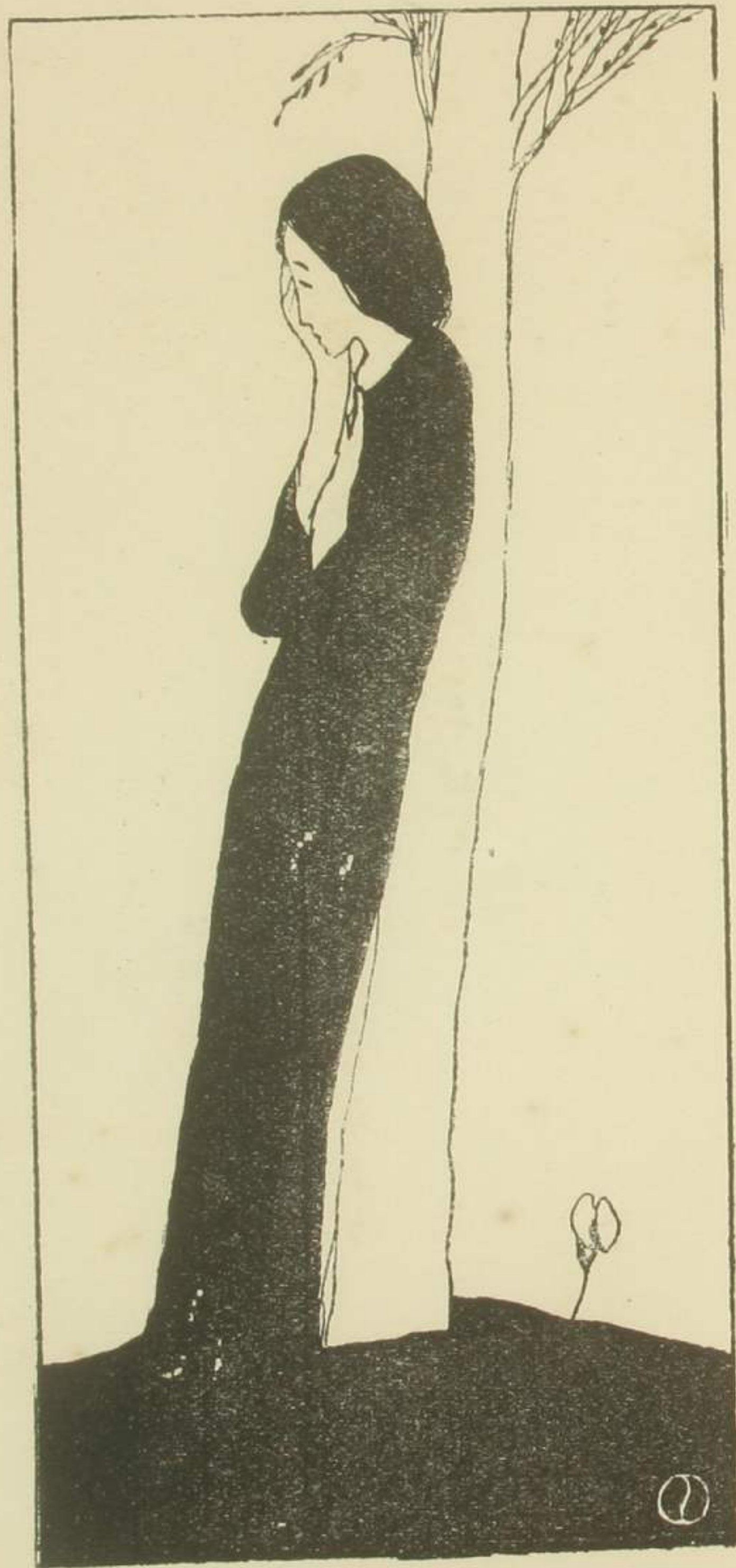




あひそめし日かやわかれの涙かやなけ  
ばにるかな心なごみて。



戀<sup>こ</sup>ふること心<sup>こころ</sup>やりかねいでてゆけば山<sup>やま</sup>  
をも河<sup>かは</sup>をもしらすきにけり。



萌えそめし何の芽生ぞ二葉なる芽より  
かなしき君とこそおもへ。



黒髪くろかみのものやわらかきふくらみに吸すは  
れゆくかなわかき心こころの。



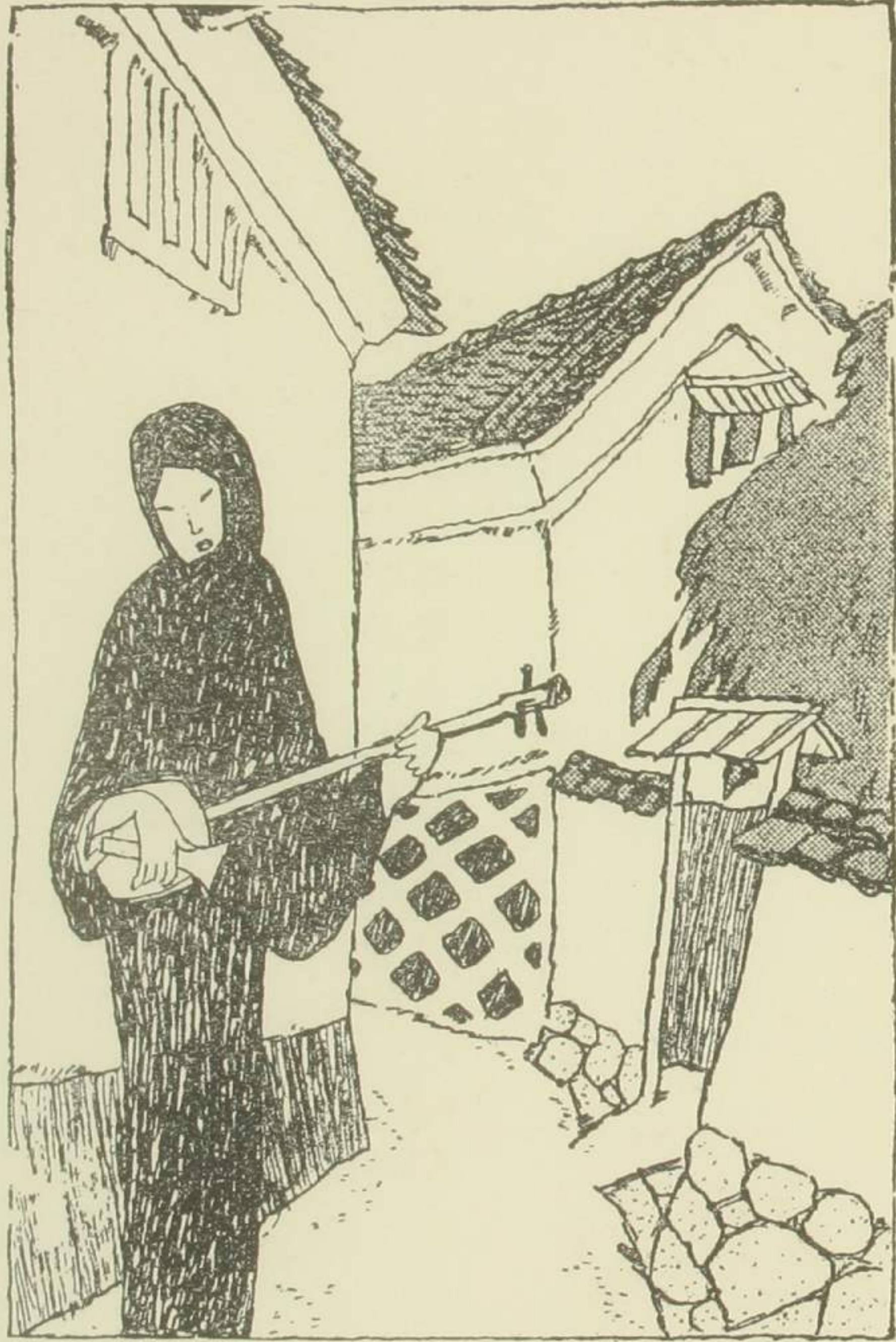
村はづれ旅商人の肩の荷にあきつみだ  
れてとべるたそがれ。



つゝじさく朝あさの涙なみだの頬ほづたひの色いろとし  
さかばかへりこよ君きみ。

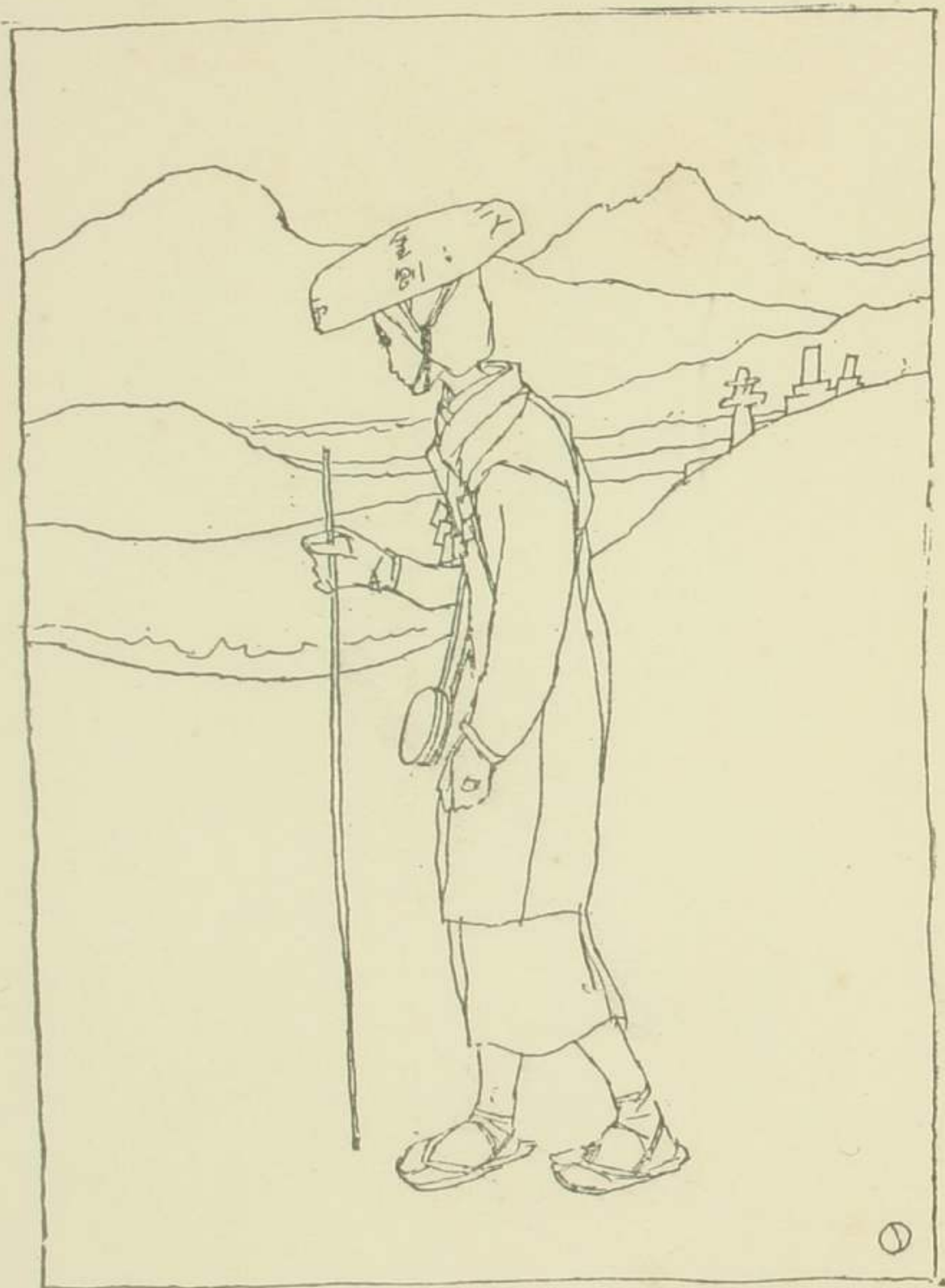


かなしくもきみはお七になれといふい  
かなるつとめわれとぐべしや。



露路のおく酢倉の裏のくらがりに盲人  
のごとく泣ける三味線。



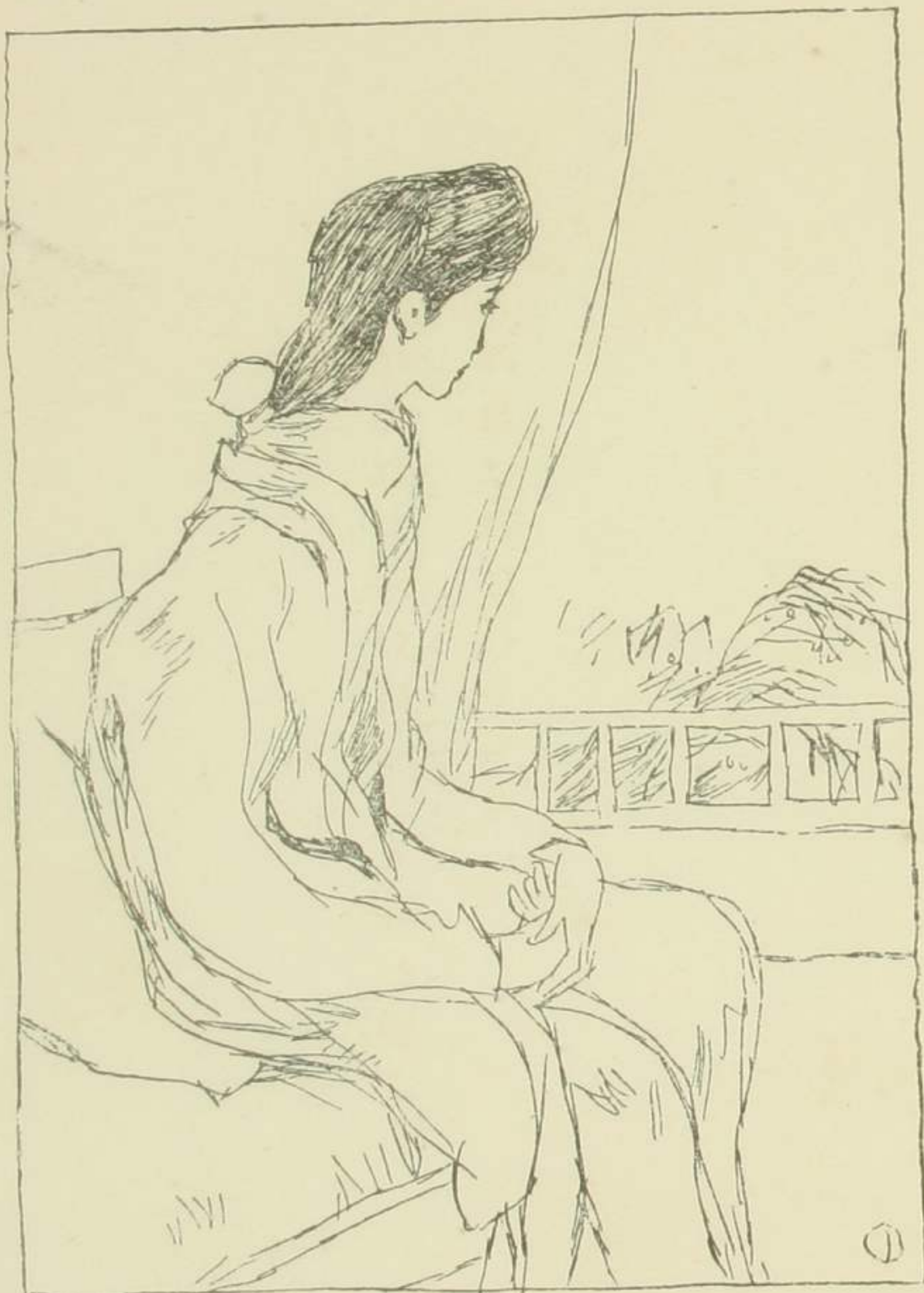


鉦かねならし信濃しんのうの國くにをゆきゆかばありし  
ながらの母ははみるらんか。

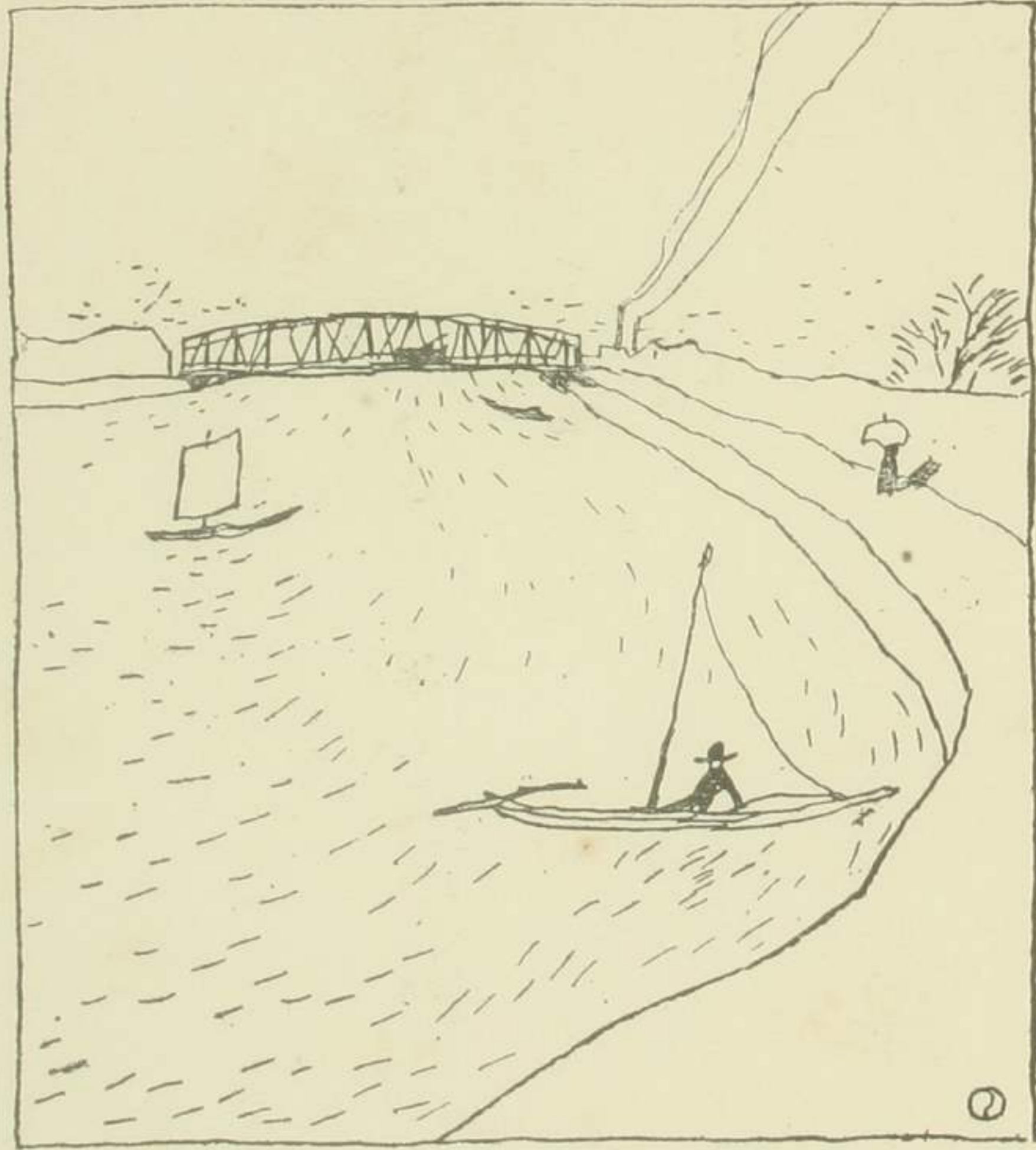


いつとなくわするゝとなく文たえてあ  
はれことしの夏もいぬめり。

ふたしつる  
まきかする



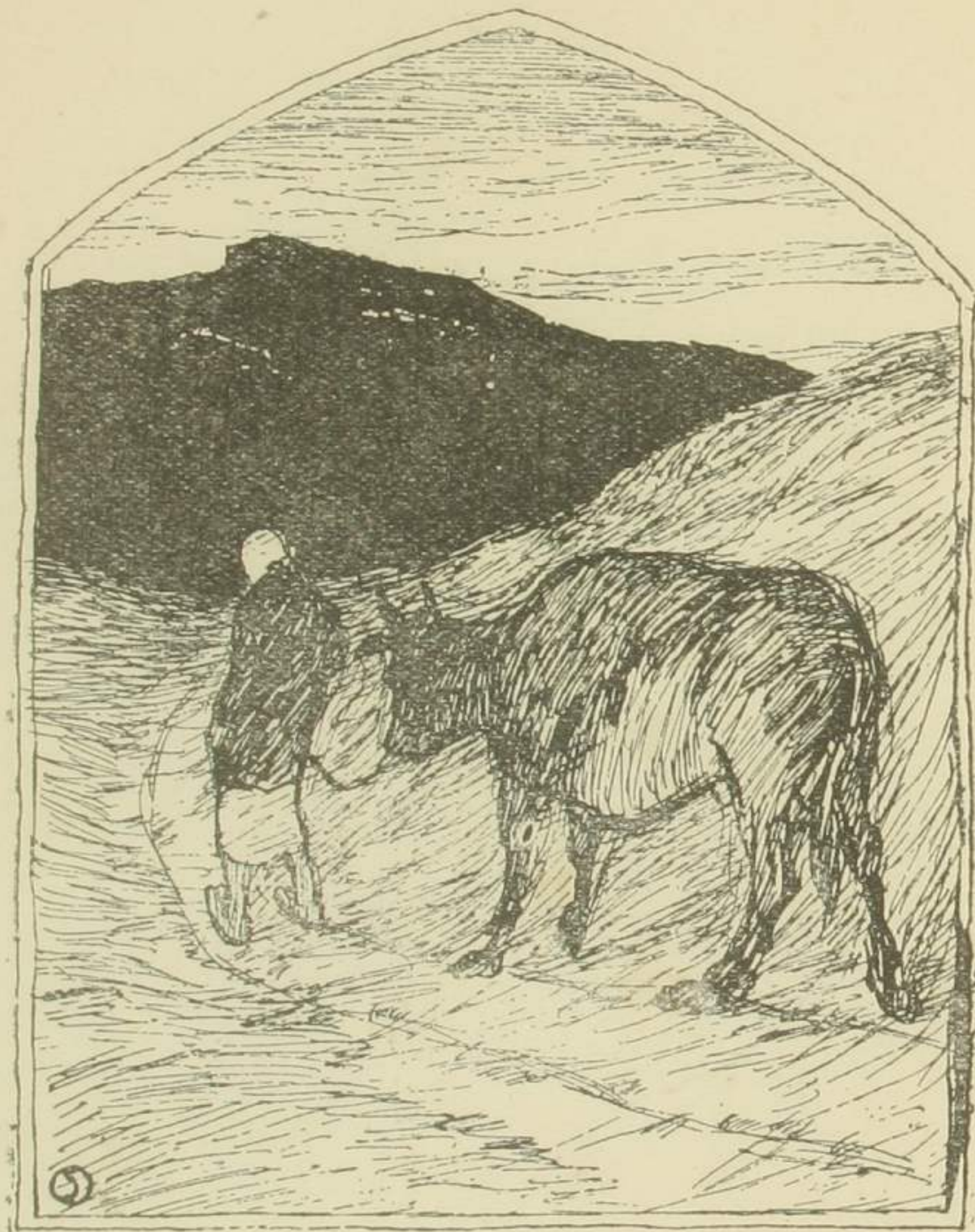
たけばぬれたかねばながき妹が髪この  
ごろみねばみだれつらんか。



鐵橋を白くぬりかへし寂しさよこの大  
川の秋の夕暮。



初秋はつあきや水みづのやうなる風かぜ吹ふけば髪かみも袂たもとも  
まかせてぞたつ。



ゆく秋の山の谷々わが母はいかにさび  
しく住みたまふらむ。



茶ちやがかりし中折帽なかまはを手にもちてものを  
言いひたる人は悲かなしも。

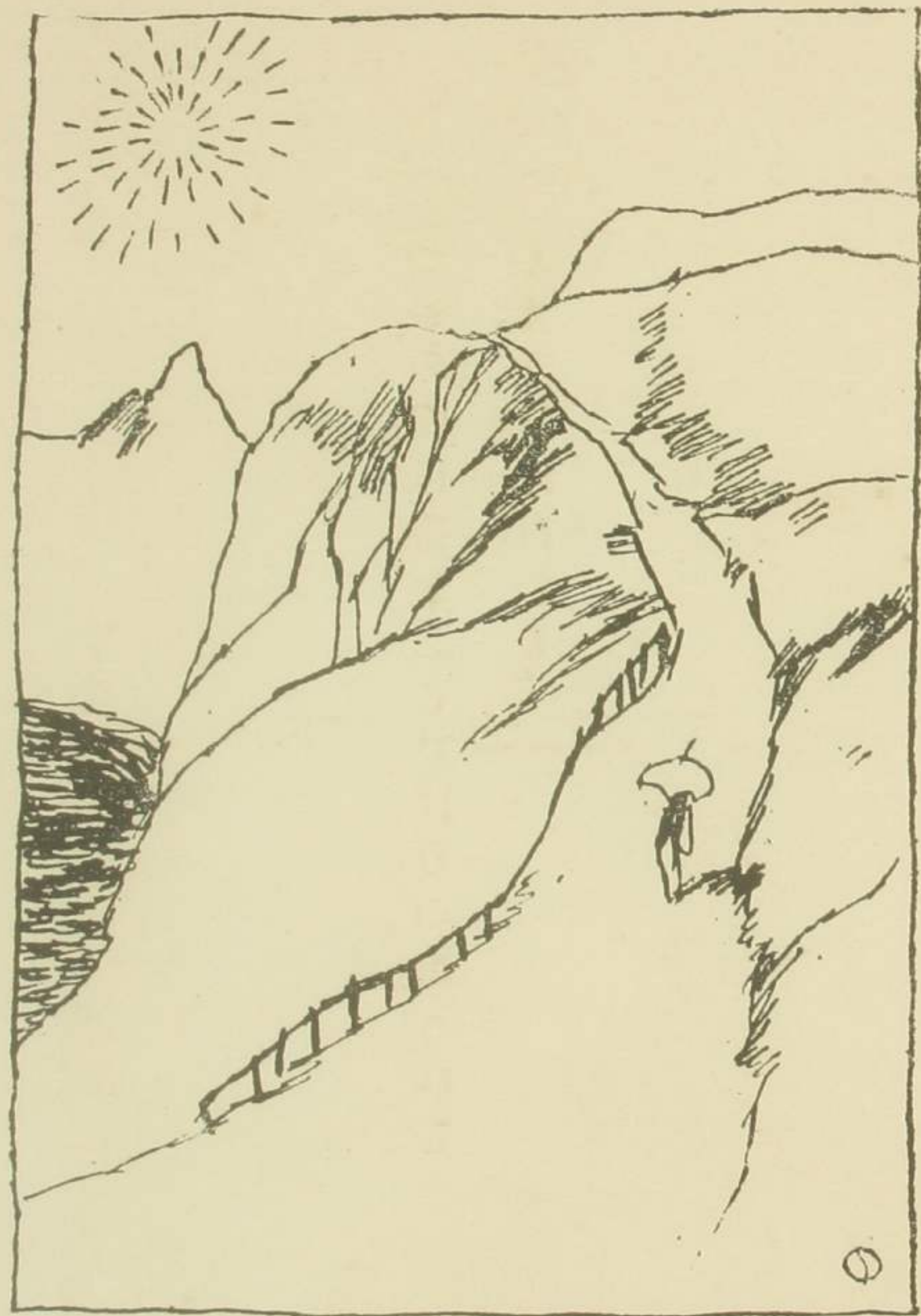


いつしらす身は公園の掛椅子に夜をま  
つ人となりひとにけらしな。

了

?





つかの間に帯をしとけば夏の海うれしく  
光り肌は白しも。



春の風海より吹けば露臺なるわが黒髪  
のそよらとなるも。



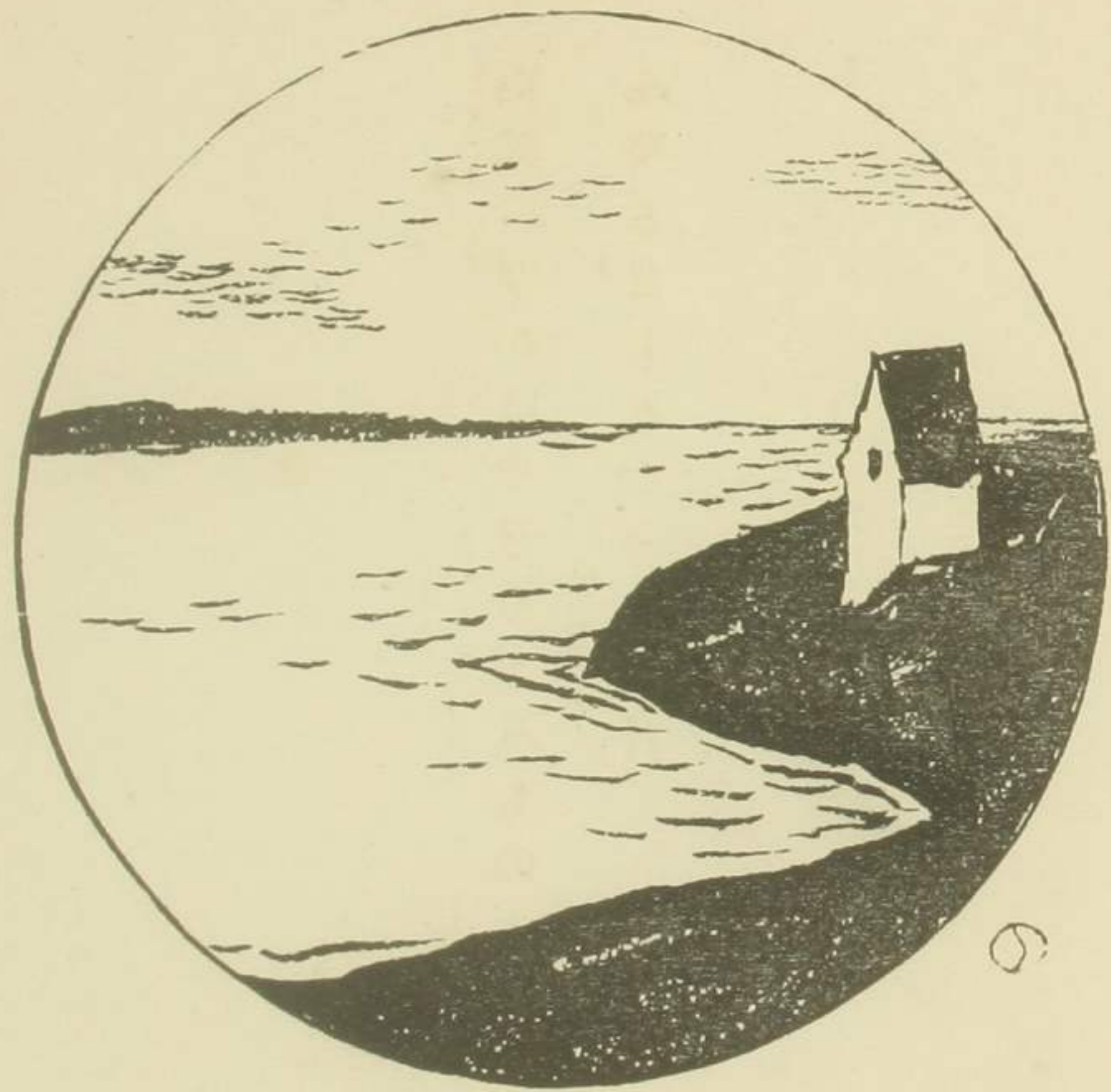
そいろにもすぎし思ひのいとほしく夜  
のねざめも秋はかなしき。



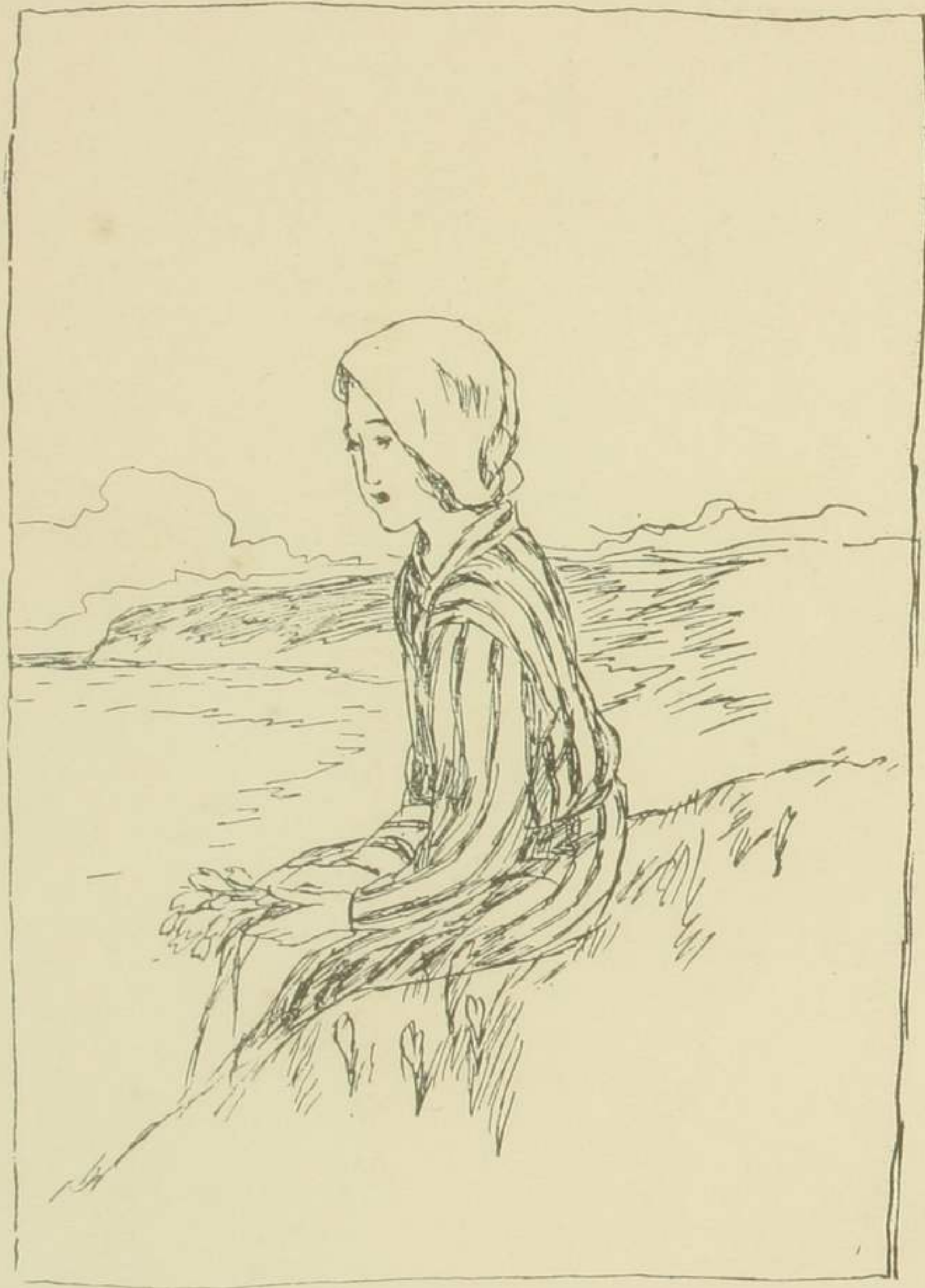
よき椅子すに黒くろき猫ねこさへきてなげく初夏しよが  
晩春ばんしゆんの濃こきコ、アかな。

白

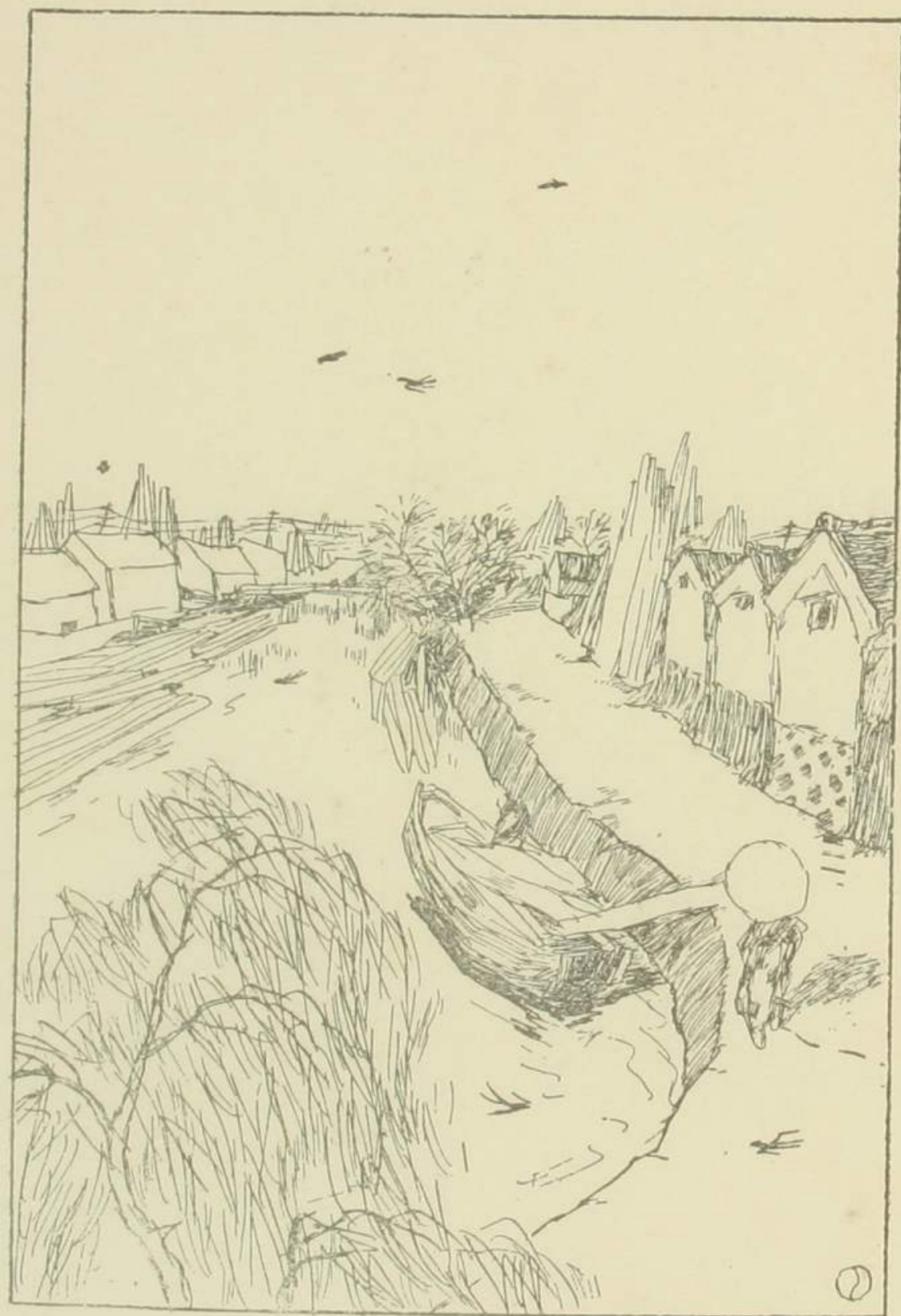
24



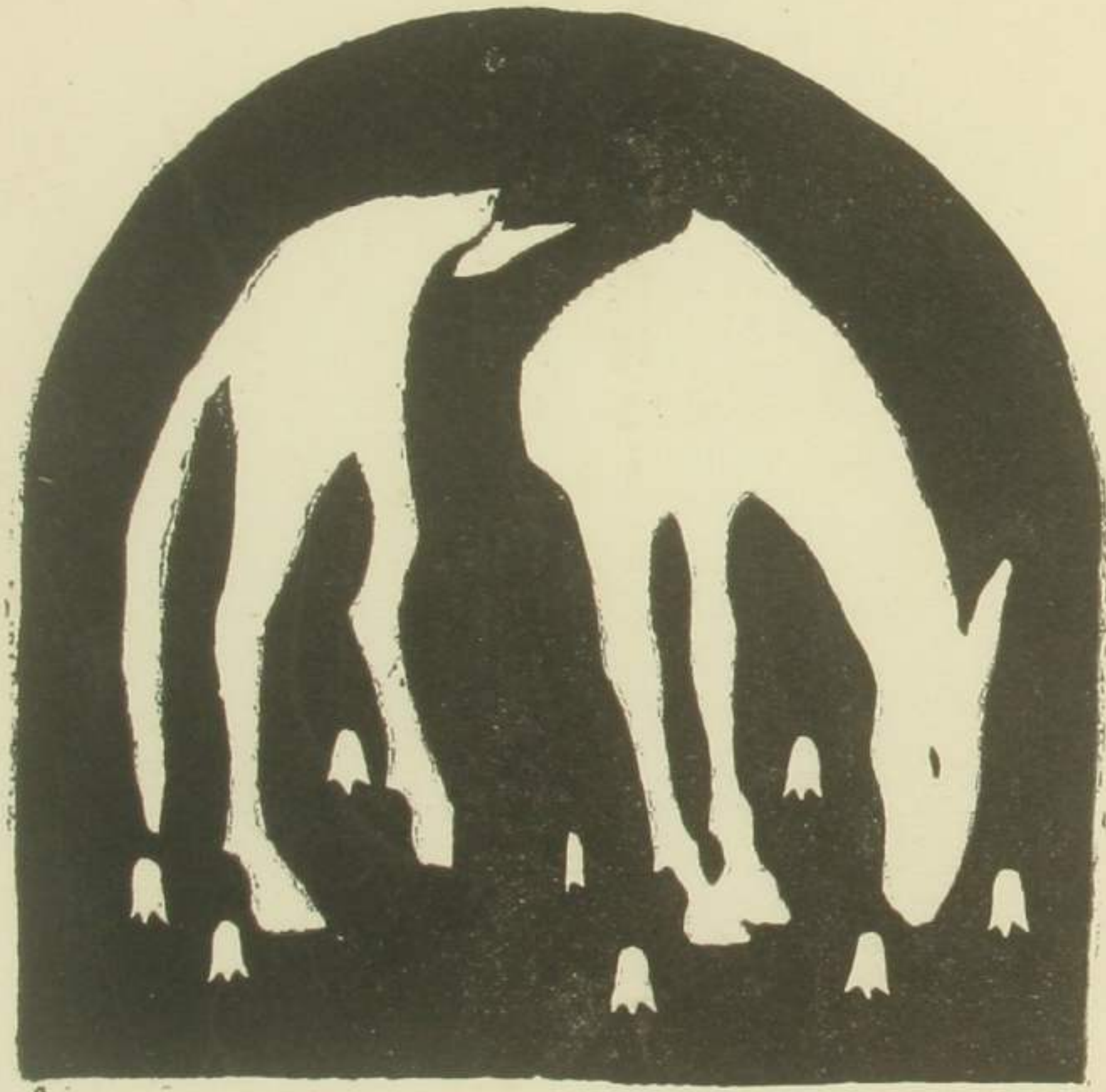
函館にゆかばやせめてみちのくのほの  
みゆる日もあるべし皐月。



筑波根の峰の白雪ありやなしやさやかに雁のなきつれてゆく。



深川<sup>ふかがは</sup>の夏<sup>なつ</sup>の夜<sup>よ</sup>こひし船唄<sup>ふなうた</sup>の木<sup>こ</sup>の香<sup>か</sup>にま  
じり水<sup>みづ</sup>のながるゝ。



泣きぬれて今來しものをあはれとも驚  
きもせで相見る人よ。

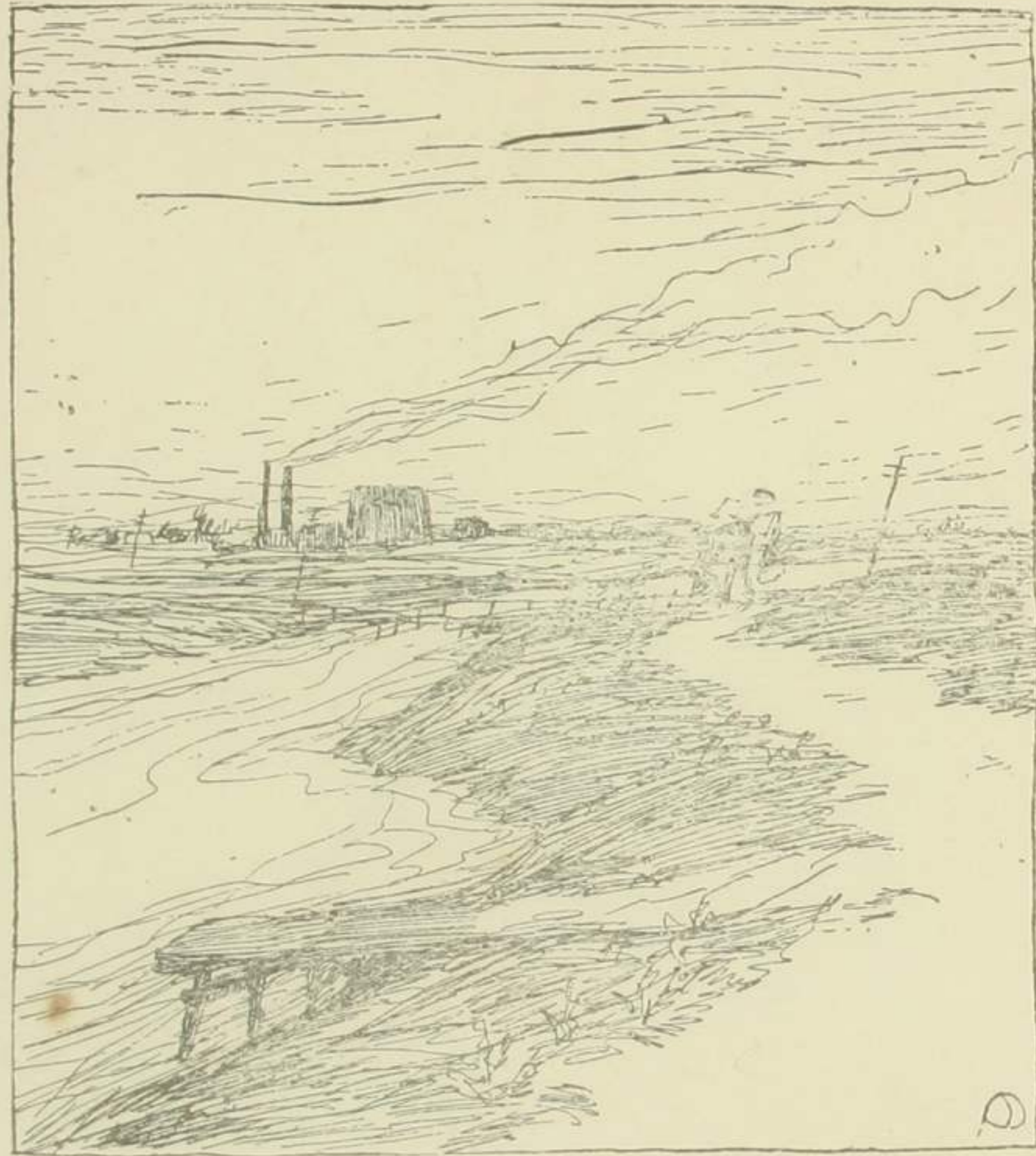




茜<sup>あかね</sup>さす紫<sup>むらさき</sup>野<sup>の</sup>ゆき標<sup>しるし</sup>野<sup>の</sup>ゆき野<sup>の</sup>守<sup>もり</sup>はみすや  
さみが袖<sup>そで</sup>ふる。



圓山まるやまの長椅べんぎに凭りてあはれにも媚婦しよめの  
あそぶ春はるのゆふぐれ。

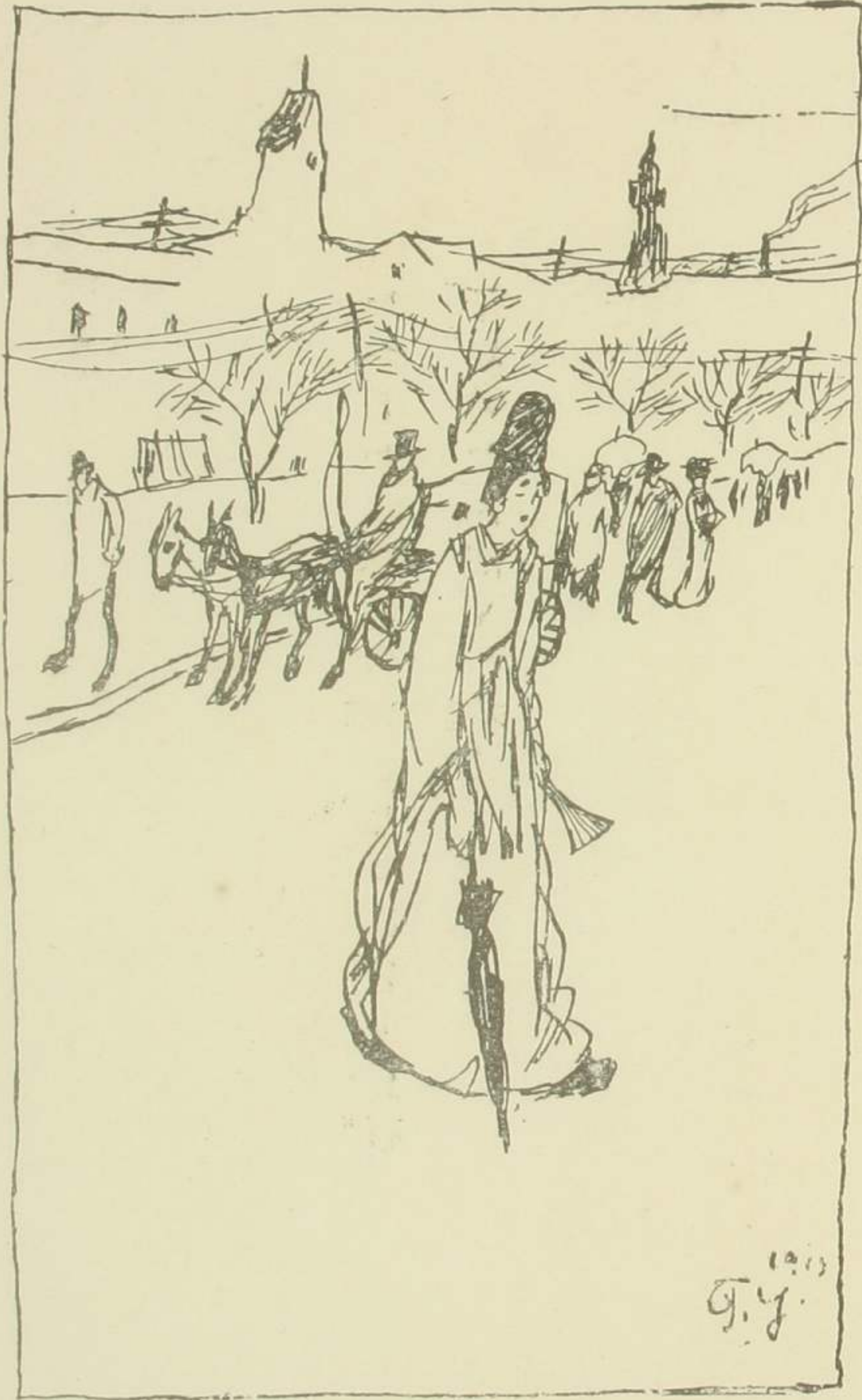


わがせこはせごのあさ川あさからわたりしり菖  
蒲あし荷なひて都みやこへにゆく。

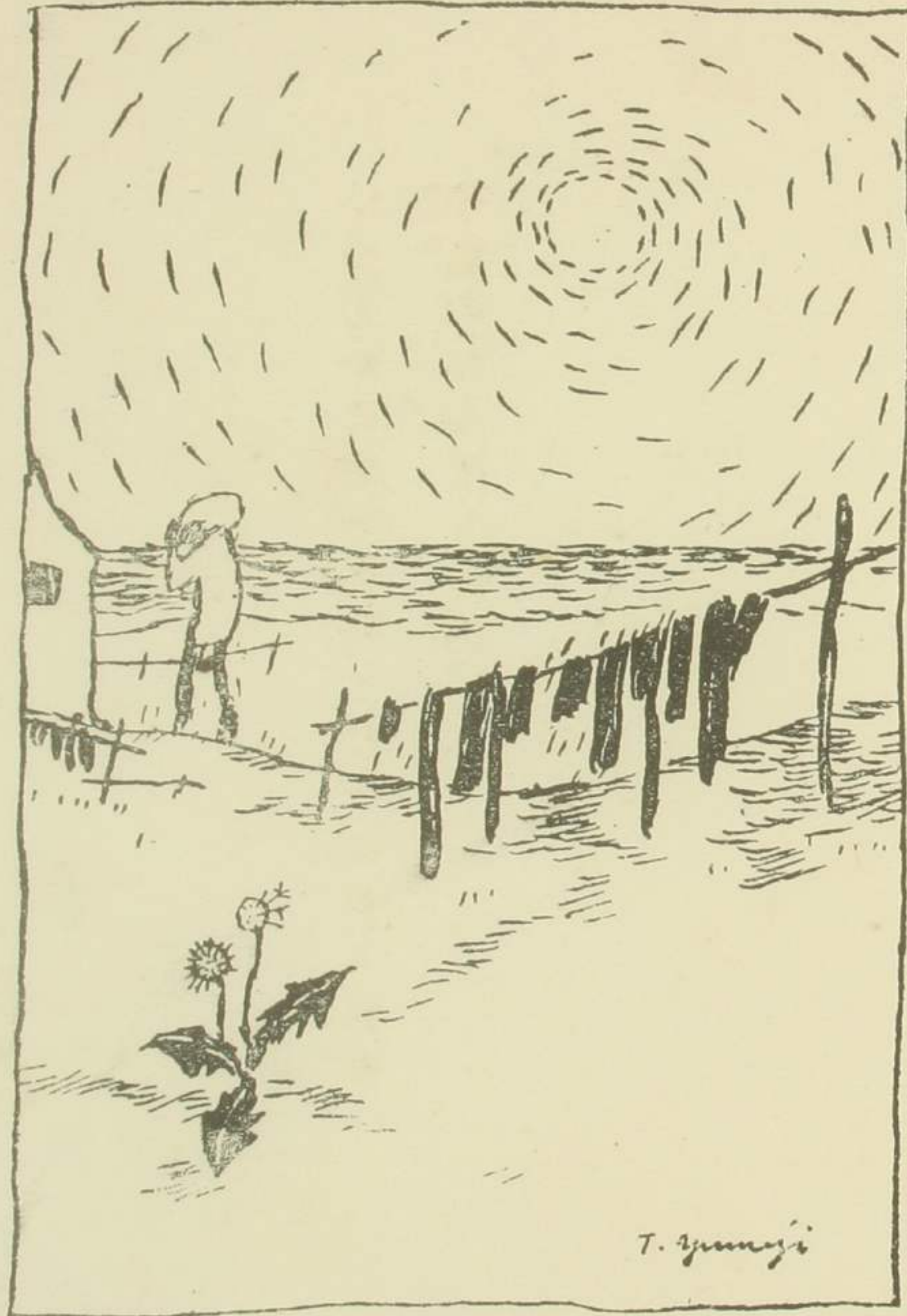


厨女の白き前掛しみてと青葱の香の  
しみて雪ふる。

何秋？



橋<sup>たかはし</sup>の<sup>か</sup>かげ<sup>ふむ</sup>路<sup>みち</sup>の<sup>やち</sup>八<sup>た</sup>衢<sup>た</sup>に<sup>も</sup>の<sup>を</sup>ぞ<sup>おも</sup>も  
ふ<sup>い</sup>妹<sup>も</sup>に<sup>あ</sup>逢<sup>は</sup>す<sup>て</sup>。

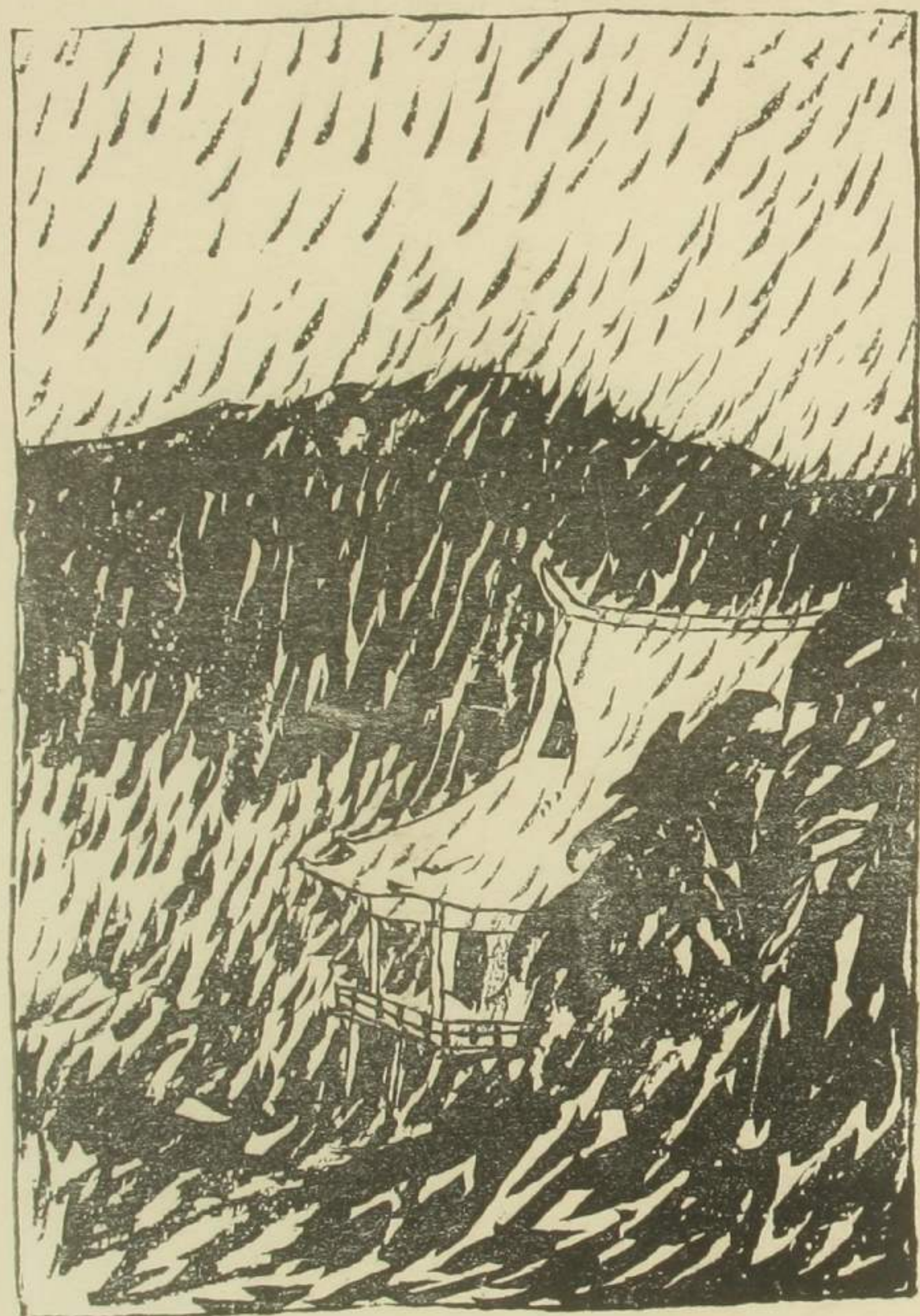


いつしかに春の名残となりけり昆布  
干場のたんぼの花。

日秋



わが背子<sup>せこ</sup>を大和<sup>おみ</sup>へやると小夜<sup>さよ</sup>ふけてあ  
かつき露<sup>つゆ</sup>にわがたちぬれし。



ぬばたまの黒髪山の山管に小雨ふりし  
さしく〜おもほゆ。





©  
1917

ど  
の  
も  
に  
は  
雪  
ふ  
り  
け  
ら  
し  
潮  
鳴  
の  
ひ  
ま  
く  
に  
き  
く  
濱  
千  
鳥  
か  
な  
。



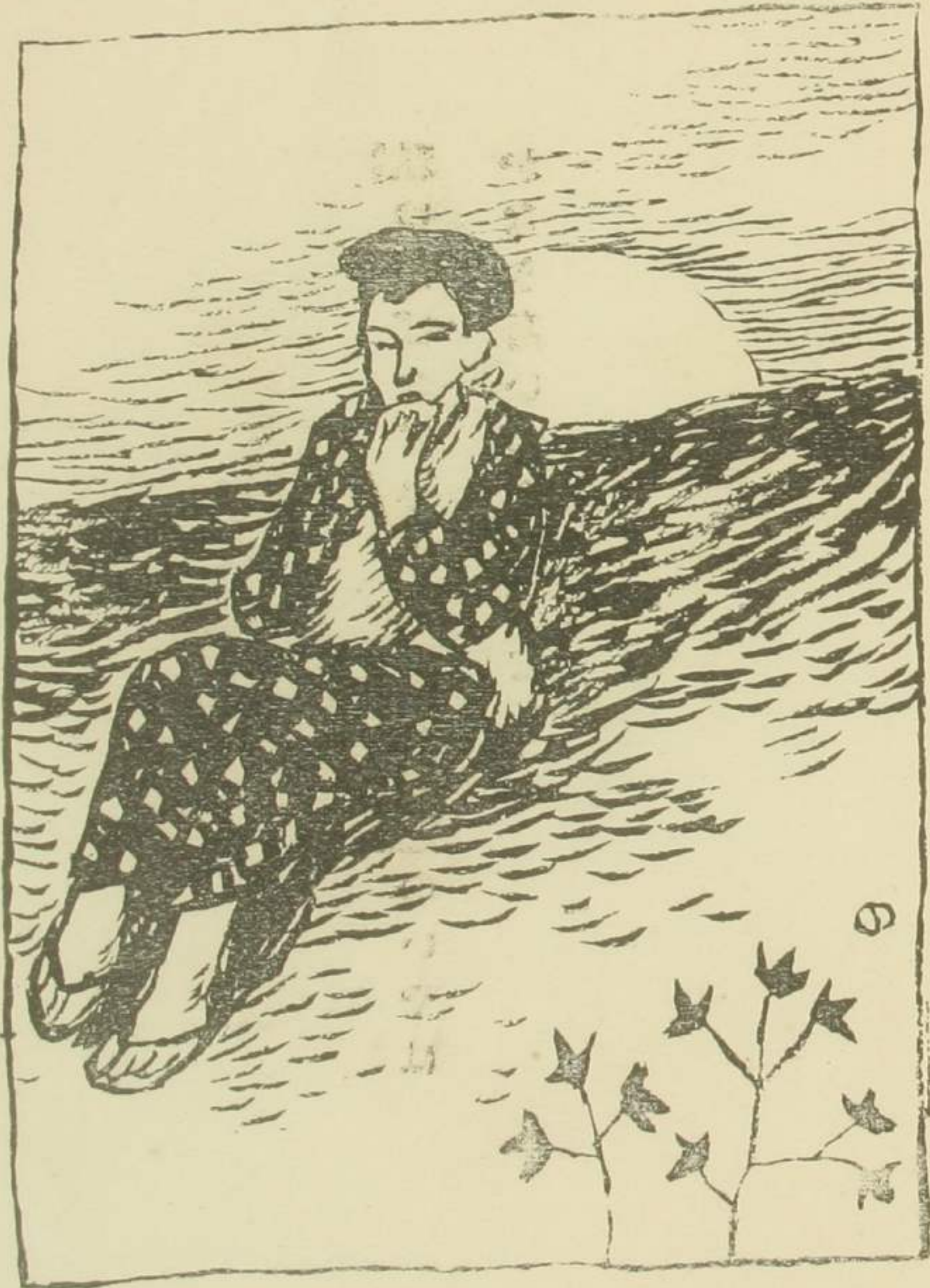
目もはるに秋の野のへをわたる鳥その  
鳥のごと旅にいでまし。



國の秋風の路。  
頬かぶりの男と肩をならべゆく和泉の



妹か門ゆきすぎかねて草結ぶ風吹さど  
くなまたかへりみむ。

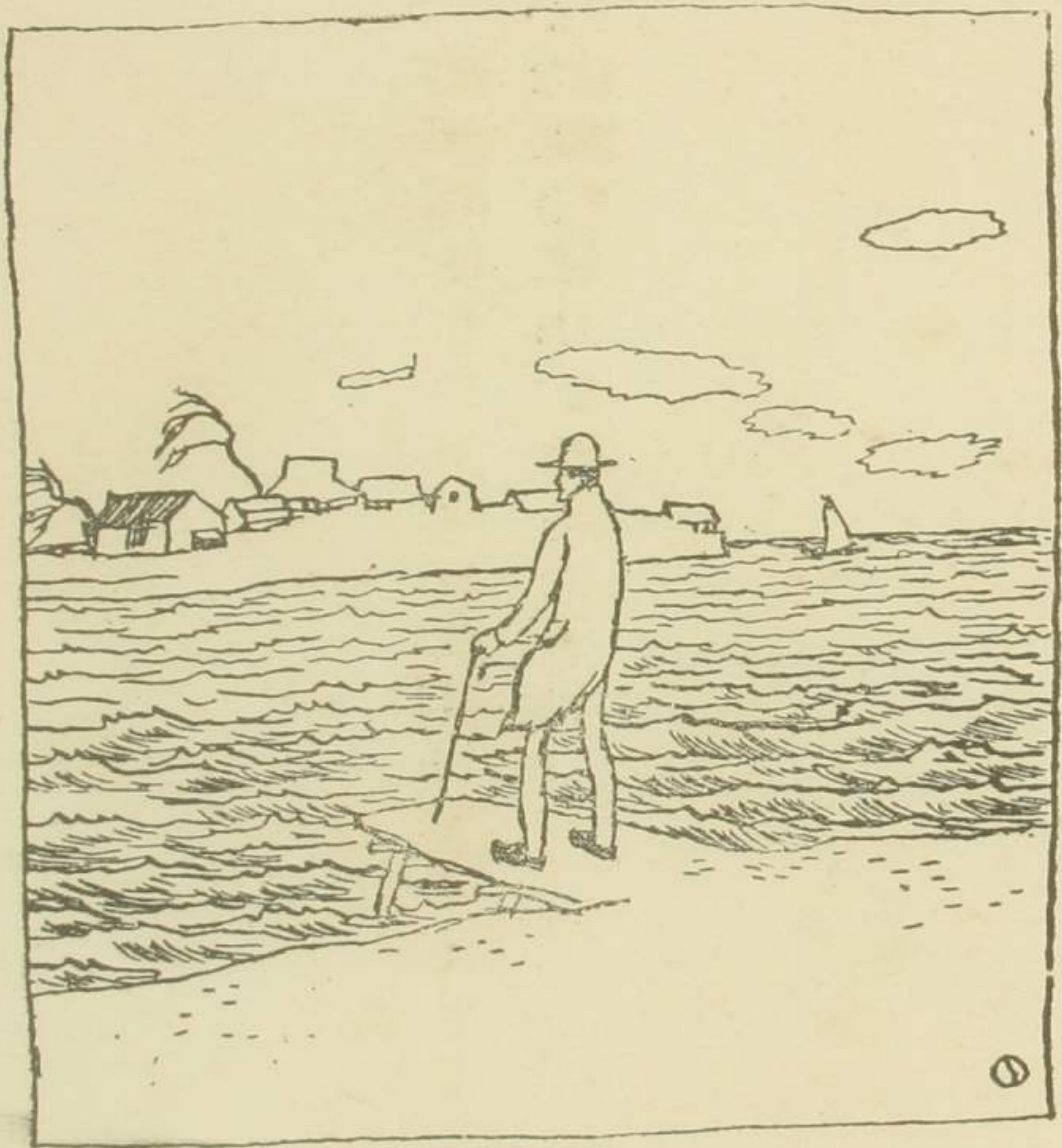


病める兒はハモニカをふき夜にいりぬ  
唐畑の黄なる月の出。

白粉



秋あきゆかばたぐひまれなる悪運あくうんのいやは  
かなき身みいづちすてなむ。



幾山河越えさりゆかば寂しさのはてな  
む國ぞ今日も旅ゆく。

物水



うらみごとたれにせんとにあらねども  
かなしきはわがきその白珠しらたま。





たまきはる命<sup>いのち</sup>ひかりて觸<sup>ふ</sup>りたれば否<sup>いな</sup>と  
は言<sup>い</sup>ひてけぬがにもよる。



大正五年十二月十日印  
大正五年十二月十三日發行

定價金壹圓貳拾錢

不許  
複製

繪入歌集  
暮菴

著者 竹久夢二  
發行所 東京市本郷區駒込林町二百三十七番地 藥瀨富次郎  
印刷者 東京市神田區錦町一丁目三番地 大澤京之助  
印刷所 東京市神田區錦町一丁目三番地 三賞會

發行所

東京市本郷區駒込林町二百三十七番地  
振替口座東京 二五〇一〇番

三陽堂書店

三陽堂發行圖書

ロンブプロオゾオ原著

總布製裝幀極優美  
全六號四百餘頁縮刷

訂正  
五版

全訂正

天

才

論

定價金壹圓貳拾錢

四六判天金箱入美本  
送費金八錢

我が文壇の泰斗夏目漱石氏は、推して天才の風貌を窺ふに近く、天才の厨川学士は、其著述の近世文學十講、又詩壇の至る處に、本書を引例せる、抑も本書の基調たるや、天才の病狂者、復雑なる大關係、中庭の犯罪者、癡癡者、鋭敏なる、蓋し空前絶後、珍奇なる、學術の例、森々、鋭敏なる、蓋し空前絶後、珍奇なる、白痴の等々、載し、鋭敏なる、蓋し空前絶後、珍奇なる、斯る研究は、無味無香、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、宗法上の精神、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、及法上の問題、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、刑罰の學、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、變動の學、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、書影の學、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、引照の學、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、訂正の學、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、勿論、研究の答へ、蓋し空前絶後、珍奇なる、

三陽堂發行圖書

アルツイバシエツ作  
武林無想庵譯

原稿紙九百數十枚の大作  
全六號四百二十頁に縮刷

全譯

サニ

定價金壹圓也

四六判總布製美本  
送費八錢

アルツイバシエツの代表的傑作として、衆評の一致してゐる本書は、彼が二十四才の作で、九〇年の出版、過渡期の思想小説を銘を打たれて公にされた。讀書界の歡迎は、露都の紙價を一時に高からしめた。其社會的影響の甚大なのに驚いた露國官憲は、遂に本書の發賣を禁止した。然し、現代の主筆クラニエリド氏は、本書を發行したる際、是は立派な高級藝術品である。

ドストイエフスキイ原著

原稿紙千五百餘枚の大作全六號  
六百餘頁に縮刷一頁一千餘字詰

全譯

罪と罰

定價金壹圓四拾錢

脊皮天金裝幀優美  
送費八錢

フリードリッヒ、ニイチエその「偶像の微光」に於て曰く「ドストイエフスキイは我が就て以て何等かの事を學ばざるを得ざりし唯一の心理學者なりとす。彼は我が生涯の最美なる幸福の事件に屬す」と。此偉大なるドストイエフスキイの代表傑作「罪と罰」は、唯徒に名のみ吾人の耳に熟して未だ其の實を見る事能ざりしは、常に吾人の遺憾とせし處。然るに今や兩生田先生の苦心の下に全譯成り空前の廉價を以て近く市場に現れんとす。敢て讀書界の慶事たるを信ぜんとす。

65,000  
3073  
版

三陽堂發行圖書

新刊 葛曲  
飾亭馬琴作  
繪本弓張月

全一冊菊判總クローヌ製  
金文字入頗美裝函入

紙數八百六十餘頁  
定價金貳圓五拾錢  
小包郵稅金拾貳錢

弓張月は馬琴一代の大傑作にして照覽起伏の妙筆致の流麗とは我が文壇の寶什にして健全多趣無双の好讀物也

絢爛を魅する名畫四百頁と對應し眞に光彩陸離たり

製版の精緻と印刷の鮮明なる能く原著の面目を傳へ近來の好出版たる世間の公評ある處也

「東京朝日新聞評」源爲朝を主題とし曲亭殊の靈筆を揮ひし椿説弓張月は曲亭作物中八犬傳に次ぐと稱せらるゝものなることは人の知る所なり、本書は北齊の挿畫を加へ全部を二段組振假名づきとし原本の體を失はざることを努めたり

「東京毎日新聞評」八犬傳に次ぐ馬琴の大傑作として、有名な本編全部に殘編拾遺等を收め其當時の繪本同様是れも板畫家として海外にまで其名を知られたる活字本になつた繪數三百餘葉を挿入してあるもので頁數八百餘繪本として近來稀に見るものと思ふ製本體裁上大に優れた定評のある文章として八犬傳以一般家庭の讀物として又單に目を樂しむる論本として缺く可からざるものと思ふ製本體裁又缺くるがない

「大坂時事新報評」曲亭馬琴が「弓張月」は彼が讀本作者としての眞價を同じ時代の京傳以上で示せる傑作にして確乎たる倫理的巧妙自在なる文章と雄大無邊なる奇想とを以て今日尙ほ其の生命をつゞくる處のものなり、されば吾人が新らしき眼を以て之れを鑑賞する素より必要の事に屬す、而して類書多きが中に北齊の雄筆になれる繪畫を挿入したると二段配列として讀み易からしめたる就中校訂の嚴密なる事と共に本書の一大特色と云ふ可し

